

Hitotsubashi
Quarterly

Captains of Industry～知と業(わざ)のフロンティア

進化する大学
キャリアを考える
将来の自分のために
大学時代に
やっておきたいこと



新入生への
メッセージ

《対談》

日本のリーダーが語る
世界競争力のある人材とは？

東京医科歯科大学長

大山喬史氏

一橋大学長 山内 進

《特集》

文化系クラブによる

三商大交流

《対談》

一橋の女性たち

NEW MILLENNIUM GROUP

霍野菜穂子氏

商学研究科准教授 山下裕子

《連載企画》

個性は主張する

サッカージャーナリスト

大住良之氏

《特集》

地球の風 地域の風

株式会社カメイホールディングス

代表取締役社長

亀井創太郎氏

連載企画

Captains

矢野二郎



新入生へのメッセージ

1

新任者メッセージ

6

巻頭特集

日本のリーダーが語る

世界競争力のある人材とは？

7

【対談】

東京医科歯科大学長／大山喬史氏

山内 進学長

社会科学系の構想力と、

医療系の患者志向とのコラボレーションで社会に貢献

特集

進化する大学

キャリアを考える

将来の自分のために

大学時代にやっておきたいこと



キャリア支援室 シニアアドバイザー／高橋治夫氏

トヨタ自動車株式会社 顧問／石坂芳男氏

JX日鉱日石金属株式会社 代表取締役社長／岡田昌徳氏

研究室訪問 chat in the den

経済学研究科教授／石倉雅男

国際企業戦略研究科准教授／古賀健太郎

特集

三商ゼミ60周年

三商大戦50周年

文化系クラブによる三商大交流



写真部

男声合唱団

26

24

22

20

18

17

16

14

13

47



45



37



34



28



7



連載企画

Captains

矢野二郎

商業教育の礎を築く

28

連載企画

一橋の女性たち

【対談】

NEW MILLENNIUM GROUP／霍野菜穂子氏

商学研究科准教授／山下裕子

34

連載企画

個性は主張する One and Only One

サッカージャーナリスト／大住良之氏

37

Love of Culture

自然療法

Tramps like us, Baby we were born to run

Book Review

政治の耽美主義化に対抗しうるか

46

特集

地球の風 地域の風

47

株式会社カメイホールディングス

代表取締役社長／亀井創太郎氏

Campus Information

◆一橋大学基金ご寄付者のご芳名

◆一橋大学大学院国際企業戦略研究科（ICS）が、

北京大学光华管理学院、ソウル大学経営学部・経営専門大学院と

「BESTビジネス・スクール提携協定」を締結しました

56

◆第7回 一橋大学関西アカデミアを開催

57

◆平成23（2011）年度 社会学部連続市民講座のご案内

58

◆一橋大学兼松講堂レジデントオーケストラ

58

国立シンフォニカーによる第2回定期演奏会を開催します

新 入 生 へ の メ ッ セ ー ジ

学長 山内 進

商学研究科長 沼上 幹

経済学研究科長 蓼沼宏一

法学研究科長 村岡啓一

社会学研究科長 村田光二

言語社会研究科長 糟谷啓介

国際企業戦略研究科長 クリスティーナ・アメージャン

経済研究所長 浅子和美

法科大学院長 橋本正博

国際・公共政策大学院長 高橋 滋



新 任 者 メ ッ セ ー ジ

経済学研究科長 蓼沼宏一

経済研究所長 浅子和美

法科大学院長 橋本正博

ひたむきに！ 知的に！ たくましく！



学長
山内 進
Susumu Yamauchi

新入生にとってとりわけ重要だと思うのはまず、「ひたむきさ」を持つことです。ひたむきにさまざまなことに取り組んでもらいたい。そして、せっかく大学に入ったのですから、「知的に」という言葉も贈りたい。一橋大学の学生にさらに求められるのは、「たくましく」ということでしょう。

皆さんは、受験勉強に一生懸命取り組んできました。そのひたむきさを、忘れないでもらいたい。在学中に夢中になれる何かを発見し、ひたむきに努力してほしいと思います。ゴルフの石川遼くんや野球の斎藤佑樹くんのように、すでに目標を見つけている人はいいいのですが、そうでない人は探す努力をしてください。大事なのは、自分が生涯かけてやりたいものは何かを見つけることです。「自分探し」などという言葉がありますが、自分は探すものではなく、自身でつくっていくものです。一生懸命やってはじめて、自分にとって大事なものが見えてくるのです。

受験勉強は、希望する大学に入るための手段という色合いが濃いものです。もちろん、これは長い人生を考えるととても重要な努力です。しかし大学での勉強は受験勉強とは違い、自分の可能性を広げるために行うものです。ですから、大学時代には、漠然と学問をするのではなく大学生らしく知的に生きるペースを育んでほしいと思います。ただ、世の中には、一生懸命やっているだけではいけないことがあります。どのようにすれば効果をあげることができるといったこともあわせて考えるのが、知的に

生きることです。知的であるにはまず、頭を鍛えること。すなわち、問題発見能力、解決能力、応用力を身に付けることが必要です。自分や社会の諸問題にきちんと対峙し、知的に解決する道筋を見出すことを想定し、研鑽してほしいと思います。そのために一生懸命考え抜いて、自分で答えを見つける努力の積み重ねこそが重要なのです。

近年「一橋大学の学生は、知的だが少しおとなしい印象がある」と、一部ではありますが、学生の就職先の企業の方から聞いたことがあります。そこで、皆さんには、ぜひ、たくましさも意識して学生生活を送ってほしいと思います。例えば、クラブ活動に参加する、ボランティアに参加する、留学するなど、今まで経験したことのない、さまざまな状況の中に自分を置いて、タフさを身に付ける、たくましい自分を自分でつくってほしいのです。

一橋大学には、ひたむきに！ 知的に！ たくましく！ 生きる人間が育つ環境が整っています。（談）





商学研究科長
沼上 幹
Tsuyoshi Numagami

「入学おめでとう」と言われ、今は報われた思いでひと休みしたくなところだと思います。しかし入学直後の4月は、少し大げさですが、自分の人生の構想を練る重要な時期です。主体的に構想を練り、構想に基づいた行動の結果を真摯に反省し、次の構想をまた練り直す、という習慣を始めてください。周囲の人に流されずに、自ら主体的に構想を創りながら成長していく知識人になる第一歩を、ぜひしっかりと踏み出してほしいと思います。

多くの新入生は、社会で役立つスキルを学ぶのが商学部だと考えているかもしれません。しかし、どのような学問にも身体で覚えるべきスキルと、本質を深く考える教養の両面が備わっています。一見スキルのように見える部分にも深い英知があり、深遠な宇宙があるのです。皆さんがそのような深い思考に触れ、それに感動し、その深い思考を自ら展開できるように成長することを私たちは皆期待しています。その深さに気づくためには、まず、スキルを馬鹿にしてはいけません。どのような学問もスキルに依存する部分があるからです。しかし同時に、スキルを身につけるだけで勉強が終わったと思ってもいけません。大学は、その表層から深層へと思考を進めることで学生の思考力を開発するところなのです。スキルの裏に思想があり、それを駆使することで本質をつかみ取り、未来を切り開く仮説を生み出すのです。4年間でそこまでたどり着くための構想をこの4月に考え抜いてほしいと思います。(談)



経済学研究科長
蓼沼 宏一
Koichi Tadenuma

これから経済学を学ぶ皆さんへ

入学おめでとうございます。皆さんは、さまざまな希望を抱いて一橋大学に入学されたことと思います。皆さんがこの先どのような道に進むにせよ、将来の社会・経済へのヴィジョンをもつことが大切です。これからの時代は、人類の生存、人々の幸福のために必要なことは何か、それを実現するにはどのようなメカニズムを作るべきかを常に考えていかなければなりません。その土台として、経済学を大いに学んでほしいと願っています。

まず、社会・経済の仕組みを深く理解する必要があると。経済学は、理論の構築と、データや資料による検証という科学的な方法によって、社会・経済のメカニズムを解明し、より良い社会への道筋を示すことを目指しています。体系的な本学部・大学院のカリキュラムを活かして、基礎から高度なレベルまで、知識と分析力を着実に高めていってください。

本研究科には、世界レベルで先端的研究を行っている教員が多数います。ゼミナールや講義の中で、研究者が未知の問題に取り組む姿勢、ものの見方・考え方を身に付ける機会が豊富にあります。また、留学制度や「学部・大学院5年一貫教育システム」なども積極的に活用し、高度な専門職に活かせる能力を磨くことを計画してみてください。

大きなヴィジョンをもち、日々小さな努力を積み、皆さん一人一人がそれぞれの社会貢献の道を見つけることを期待しています。(談)



法学研究科長
村岡 啓一
Keiichi Muraoka

法律の背景には人がいる。国内外で人と接する多彩な経験を！

法律家に必要なリーガルマインド(法的思考)とは、法律の背後にある人間を理解し、一定の立場から問題解決の道筋を示すことができる複眼的な思考のことをいいます。紛争の解決に唯一の「正解」はありません。その紛争を解決するツールが法律であり、法律家は紛争を解決するクラフトマン、つまり職人なのです。リーガルマインドは、知識量ではなく、持っている知識を使って目標のゴールに向けていかに戦略的にアプローチするかという職人の知恵なのです。法学部が法律と国際関係を融合させた教育を行っているのも、グローバル化した現代では、人間の紛争を国際的な視野で見ることが不可欠だからです。

大学4年間に、多くの体験をすることをお勧めします。課外活動などで、人間関係の軋轢をどう解決するかで悩んだ経験があるかないかは、将来、大きな違いが生じてきます。また、広い視野を持つには海外留学が最適です。こうした経験を通じて、自分は法律家になって「何をしたいのか」が見えてくれば、大学の4年間は実に意味があったといえます。

もう一つ大学の重要な役割に、研究者の養成があります。しかし、ここ数年、修士および博士の定員割れが続いています。そこで、研究者を志す人に、経済的支援と身分保障などの優遇策が必要と考えています。(談)



社会学研究科長
村田光二
Koji Murata

「選択する」覚悟を持とう！

新生に最初に言いたいのは、「選択する」ということです。大学に入るとカリキュラムはもちろん、生活の多くの部分を自分で決めることになります。その選択を意識してやってほしいということです。選択には責任が伴いますし、何を選ぶかがとても大事になります。部活やサークル、アルバイトを選ぶ人もいます。何でも構いませんが、意識的な選択をしてほしいというのが何よりの願いです。選ぶことはある意味では、自分の別の可能性をつぶすことです。つまり、選ばなかった道はいったん閉ざされてしまいます。

若い時には夢や可能性は広がっていますが、選べるのはそのうちの一つに過ぎません。その大きな選択の過程では、いくつかの小さな選択肢から選ぶことを重ねてきたのです。選ぶ時は怖がらずに選ぶ。それで失敗したとしても、改めて調べて選び直せばいいのです。選択肢が少なければ、そこに賭けなければなりませんから集中できます。逆につまみ食いの手を広げると、自分の限界へのチャレンジという点では甘くなってしまう。

社会学部の1学年次の必修科目は2科目です。ほかに学部の講義科目は選べませんから、共通科目の中から将来の自分の目標に照らして選んでほしいと思います。それは自分で選ぶ習慣を身に付ける第一歩なのです。(談)



言語社会研究科長
糟谷啓介
Keisuke Kasuya

自分に問いかけながら、やりたいことを探してほしい

自由な時間と空間の中で自主性を持って行動し、自分を育てていく場が大学です。目にしたことに条件反射的に飛びつくのではなく、自分に問いかけながら時間を掛けて自分がやりたいことを探してもらいたい。そのためには、どんなジャンルでも構いませんから本を読むことが大事です。情報を得るのはインターネットが便利かもしれませんが、それだけではなく本を何度も読み返すことを通じて、一人でじっくり考える時間が必要なのです。しかし、教員や先輩、友人などと意見交換をする時間もまた重要です。大学には全国からさまざまな背景の人たちが集まっています。海外からの留学生も数多くいます。こうした人たちとの交流が、自分を育てていくことに繋がります。

以前、1年間海外をあちこち旅していたゼミ生がいました。これまで出来なかったようなことや、留学、インターンシップ、資格などに挑戦するのでもいいでしょう。大学は、キャンパスの中だけではありません。学外も含めて自主的な活動をする空間そのものです。自分自身にエンジンをかけて、自分で自分が面白いと思える時間をつくることです。

研究で重要なのはオリジナリティです。言語社会研究科の学生には、多くの研究を積み重ねた先に、自分の新しいレールを敷いてもらいたいと思います。(談)



国際企業戦略研究科長
クリステイーナ・アメイジャン
Christina Ahmajian

間違える勇気を持ってください！ 失敗体験が重要なのです

英語は得意ですか？ヘタで結構です。プロークン・イングリッシュで構いませんから積極的に話しかけることです。重要なのは、間違えることを恐れずに、世界中の人々とコミュニケーションすること、自分の意見をしっかりと伝えることです。完璧な英語を話す人などいません。

英語に限らず、失敗する覚悟でさまざまなことに挑戦してもらいたいです。失敗からは多くのことを学べるからです。世界的なビジネスリーダーを見ると、若いころに失敗の経験をしています。学生時代だからこそ失敗が許されるのです。難しい科目にあえてチャレンジする、または留学するなど、失敗する可能性があっても挑戦する価値のあることがいくつもあります。国際企業戦略研究科(ICS)では、北京大学、ソウル大学と提携してBEST(Beijing・Seoul・Tokyo)プログラムという企業研究を進めています。これなども挑戦がいがあると思いませんか。

なお、外から日本を見ると、日本はあいかわらず高く評価されており、国内においてはわからない日本の役割が見えてきます。経済成長の著しい中国や韓国は、日本の過去の事例を研究していますし、少子高齢化社会における経済運営の先行事例として、現在の日本にも注目しているのです。まずは、自国のポジ션을正しく認識することから始めましょう。(談)



経済研究所長

浅子和美

Kazumi Asako

一橋大学経済研究所は、1940年に創設された伝統のある研究所で、一橋大学の附置研究所として位置づけられています。(付属でなく)附置研究所には、学術研究や経済社会の変化に対応しながら、学外にも開かれた研究拠点として機能することが期待され、現実にも、国内外の研究者のコミュニティとして、先端的な共同研究の拠点になっています。

経済研究所の代名詞となっているのが、長期経済統計の整備に代表される実証研究の殿堂との評価です。日本の『長期経済統計』(全14巻)は日経・経済図書文化賞特賞に輝いた金字塔であり、現在は、『アジア長期経済統計』の刊行が始まっています。ほかに、グローバルCOEプログラムの「社会科学の高度統計・実証分析拠点構築」や「日本経済の物価変動ダイナミクスの解明」「ロシア研究センター」など、大規模な研究プロジェクトが進行中であり、既に終了したものも多数あります。

研究所には、日本・アジア経済、米・欧・ロシア経済、現代経済、経済体制、経済システム解析の5研究部門があり、ほかに付属施設の社会科学統計情報研究センター、経済制度研究センターの2センターと世代間問題研究機構も研究を担っています。これからも世界に開かれた独創的で先端的な実証研究の共同研究拠点として、研究活動を推進していきます。(談)

学部時代には法律以外の副専門も深く掘れ！



法科大学院

法科大学院長
橋本正博

Masahiro Hashimoto

法律は直接答えを教えてくれるものというより、利害関係を調整し、公平で妥当な結論を見出す方法論についての知識です。ときには、権力の恣意を防ぐため、堅固な理屈を組み立てます。しかし、理屈の美しさにとらわれて生身の人間を見失うと、本末転倒です。研究者である私もその危険と隣り合わせなので、時々、「自分が裁かれるとき、これで納得できるか」と反省するようにしています。人が生きている現場に、自分を擬似的において、考えるためです。法科大学院は実務家を養成する機関です。ガイダンスが終わった瞬間から、生身の人間を相手にする仕事が始まるといってもいいでしょう。

法律は多くの利害対立を俯瞰的に調整するツールですから、立場を相対化する視点を、できれば複数持ちたい。学部時代には多様な経験をし、自分の中に、複眼的な判断の立脚点をつくることです。私自身、乱読した人文系の書物から、専門にとっても重要な示唆を受けました。お勧めしたいのは、大学が提供する種々の機会を利用して、ほかの分野の知識のみならず方法論に親しむこと。法学は射程の長い学問です。法曹を目指すなら、学部時代に副専門を持つぐらいの意識で、表面だけでなくその源泉を目指して深く掘っていく。それが、回り道のように、意外とすぐれた法曹への近道なのです。(談)

法律・経済系以外の学部生に、新しいキャリアパスへの可能性が広がる



国際・公共政策大学院

国際・公共政策大学院長
高橋 滋

Shigeru Takahashi

2012年から国家公務員試験に、大学院修了者や社会人を対象とする新しい採用枠が設けられることになりました。国際・公共政策大学院(IPP)は、専門職大学院として、公務員や国際機関、NPOなどにターゲットを絞った高度専門職業人育成を担っています。公務員試験の枠が広がったことにより、例えば、商学部や社会学部の学生がIPPに進学して、公務員を目指すといった新しいキャリアパスへの可能性がさらに広がりました。

IPPの特徴は、国際・公共政策の名が示すように、国際色豊かなこと。留学生比率は約4割で、アジアから留学生を受け入れているアジア公共政策プログラムとの交流も盛んです。さらに、中国人民大学、上海財経大学、韓国の成均館大学との連携を強化。英語での授業の相互提供を行っています。一橋大学の国際化の先頭に立って、IPPは東アジアとの交流を進めているのです。

授業は、ワークショップ、インターンシップ、コンサルティング・プロジェクトなど、実践に直接結びつき、応用力が増す訓練を取り入れています。学生の皆さんに期待するのは、スタートダッシュ。2年間は短いので、前半はがむしゃらに勉強してください。(談)

Masahiro Hashimoto



法科大学院長
橋本正博

Kazumi Asako



経済研究所長
浅子和美

Koichi Tadenuma



経済学研究科長
蓼沼宏一

「高い志を持って!」「緊張感を持って!」

高い志を持って! 緊張感を持って! —— 一橋大学法科大学院創設以来、院長や教職員、そして学生が定着させてきたスローガンです。単に司法試験合格を目指すのではなく、その先の法曹としてのあるべき姿を追求する精神。それを是として付いてきた学生の精進の結果として、高い合格率があると思います。合格はもちろん大事な目標ですが、高い理想に向けて邁進する姿勢や、目的に向かって背伸びをしながら、仲間と支え合う大志を抱く人間同士の付き合いこそが一橋の宝です。こうした精神は、「高い志を持って!」という言葉で表現できます。

それぞれが努力することで、全体を高め、それによって自分も引き上げられる緊張感。そして、冷めた競争意識とも温かい助け合いとも違う、志気を高め合うモチベーションは、まさに「緊張感を持って!」です。

近年、法学部出身者以外の入学者が減っているという現状があります。やむを得ない面もありますが、法学と違った畑の人が法曹を目指すことは、社会全体にとっても、法曹界にとっても好ましいことですし、一緒に学ぶ法学部出身者にとっても、大いに刺激となります。社会経験者や法学部出身者以外の未修者比率を増やす対策や彼らに対する教育カリキュラムの一層の充実を図っていききたいと思います。(談)

大型研究プロジェクトと個人研究のバランスを考えたい

一橋大学経済研究所は、実証研究の拠点として、高く評価されています。ここ5~10年の傾向を見ると、大型プロジェクトが数多く進行しており、それに伴って入ってきた大きな研究資金を回転させながら研究を進めるといったパターンになっています。それだけ、研究が高く評価されているわけですが、その功罪を立ち止まって見直す時期ともいえます。大型研究資金があることにより、逆に制約を受けるという側面があるからです。

例えば、資金の活用に向けてシンポジウムやコンファレンスに追われてしまうことがあります。また、かつては個人がこつこつと数年がかりで研究を重ねて一定の成果を出すのが多かったと思いますが、昨今ではどうしても研究成果を急かされてしまう傾向も少なからずあります。また、組織全体としては事務局も含めて施設や人的資本の制約があって、大型プロジェクトがいくつも同時に走っていると、サポート体制の維持が難しい。こういった全体のバランスを考えたいということです。

経済研究所の教員は学部の授業には直接タッチはしていません。しかし、案外知られていませんが、大学院の重点化がされて以降研究所の教員も経済学研究科の多くの院生の研究指導をしてきました。学部の学生には、まず理論的な考え方や歴史などをしっかり学び、その上で仮説を立て、データを踏まえ、経済学や計量経済学をツールとして研究に臨んでほしいと思います。(談)

研究と教育の相乗効果を生む環境の整備

経済学研究科は、国立大学法人評価で研究と教育の両面で高い評価を得ました。教員が先端的研究を行い、知識体系を整理して学生と議論を交わし、自らの研究を見つめ直して新たな研究の緒をつかむ——。こうした研究と教育の相乗効果を生む仕組みをさらに強化し、教職員が切磋琢磨する環境を整えていきたいと考えています。

同時に、研究と教育の両面における国際化は急務です。研究面では、共同研究の推進や国際会議開催などにより、経済学研究のネットワークのハブとしての機能を一層高め、国際的な評価に堪える研究成果を積極的に発信していく必要があります。教育面では、英語による専門科目の増加、国際経済の現場で役立つ実践的な英語教育の充実などを図ります。

先駆的に導入した「学部・大学院一貫教育カリキュラム」は定着し、その社会的重要性は増えています。一貫教育の各段階の成果を再検討し、必要な改善を重ねていく所存です。

一方、科研費等による大型研究プロジェクトが多数進行中であるとともに、国際経済分析や数値解析に強い専門職を養成するための革新的な教育プロジェクトにも取り組んでいます。これらの研究・教育プロジェクトを中長期的に連結する「環」として、「現代経済システム研究センター」があります。今後も、革新とその継続という課題に、一層努力して取り組んでいきます。(談)

日本のリーダーが語る 世界競争力のある人材とは？

「私は理系だけれど中身は文系だ」と笑う東京医科歯科大学の大山喬史学長。医療現場では必然的に患者さんの「老い」や「苦痛」「死」と向き合うことになるため、文系的な思考が求められるという。ともに人間を相手にする学問だが、その方向は医学が個人に向かうのに対して、社会科学は社会に向かう。山内学長との対談から、両大学のコラボレーションによる社会貢献の大きな芽が見えてきた。



社会科学系の構想力と、 医療系の患者志向とのコラボレーションで社会に貢献

知と癒しの匠を創造する

山内 大学案内の大山学長のメッセージを拝読すると、随所に論語がちりばめられ、説得力があります。論語がお好きなんですね。

大山 もともと漢詩が好きだったのですが、あるとき、以前京都大学にいらっしやった東洋史学者の貝塚茂樹先生が論語を解説した本に触れてから、のめり込むようになりました。頼れる言葉や自分の指針となるような言葉をそこに見出して、いろいろな生方の論語に関する本を読むようになったのです。

山内 先生は当然理系ですよ？ 漢詩が好きだったというのは面白いですね。

大山 何となく好きだったのですが……。私は理系ですが、中身は文系じゃないかな（笑）。もともと文系の人間が理系に興味を持って、理系の勉強をするようになった。医師には文系のベースが必要だと思っのです。

山内 それは、どうしてですか。

大山 東京医科歯科大学では、「知と癒しの匠を創造する」というミッションを立ち上げましたが、それとも関連しています。私は、これまで臨床医として、がんや交通事故、感染症などで顎まで失う障害の大きな患者さんと接してきました。患者さんたちからは、いろいろなことを教わります。

たくさんさんの悩みを聞くのですが、こうした患者さんの言葉を理解するのはかなり難しい。文系のさまざまな本を読んでいないと、適切な受け答えができないのです。医師は、患者さんに対し「やれることはやりました」と言いがちです。しかし、私としては、医師であれば最善を尽くすのは当然のことです。結果はどうあれ「いろいろありがとうございました」という患者さんや家族の、感謝の言葉や気持ちが返ってきて、初めて、医療人としての真の達成感があるのです。

山内 なるほど。生身なまみの患者さんが相手だという医療現場の厳しさですね。

大山 漢方薬を入れる百味筆筒があります。私が学生に対して医師としての姿勢を語るとき、この百味筆筒を例に、学生時代はとにかくより多くの知識を吸収し、医療人として多くの引き出しを持つように言っています。患者さんを見て、自分で判断し、引き出しの中身を組み合わせ使用する。それが技術というものです。重要なのは、知識と



東京医科歯科大学長

大山喬史氏

大山喬史（おおやま・たかし） 1966年東京医科歯科大学歯学部卒業。1979年東京医科歯科大学歯学部附属病院顎口腔機能治療部教授。同大歯学部附属歯科技工士学校長、同大歯学部附属病院長、日本補綴歯科学会会長、日本スポーツ歯科医学会理事などを歴任。2003年東京医科歯科大学副学長、2005年同大学理事。2008年同大学長就任。

技術のコンビネーションです。知識をとおして技術を得る。得た技術をとおしてまた知識を得る。人間性をそこに加味することで、「知の匠」を創り出すことになるわけです。「癒し」は論語でいえば、「恕」に当たります。忠は自分の良心に忠実なことであり、恕は他人の身になって考える知的な同情を持つこと。「惻隱の情」という言葉もありますが、患者さんの思いを理解する、そうした人格者こそ「匠」ではないでしょうか。そういう人材を育てようと、2010年に、「知と癒しの匠を創造する」というミッションを打ち出したのです。

山内 「匠」という言葉をミッションに取り入れているのが面白いですね。匠はどちらかというと伝統芸能や職人の技術などを表すときに使われる言葉です。それを、あえて医療に使ったところに、興味を持ちました。深く考えるきっかけになると思います。

大山 私は陶芸が趣味で、窯元によく行きますし、人間国宝の方との付き合いもあります。彼らの技術力については言わずもがなですが、人間的にすばらしい。言葉のひとつと言ひと言が実に奥が深いのです。医療の現場でもそうした存在が望ましいと考えて、匠という言葉を使うことにしたのです。

山内 東京医科歯科大学という医学と歯学において日本を代表する大学ですが、姿勢はとても謙虚なのですね。

患者さんこそが医師を育てる 見えない教科書

大山 4月に新入生に90分ほど「論語の世界」について話をするにしています。学問は何のためにするのか？ 論語にも出ていますが、昔の人は自分

のために勉強しました。しかし、今の人は、自己を顕示するために勉強するようなどころがある。目先の損得、目先の名声、目先の地位にこだわらず、「人知らずして慍^いらず」、自分を研鑽していれば必ず誰が見ているのです。今勉強しているのは人のためなのだと伝えていきます。では、学生時代のお前はどうかだったか？ と聞かれると少し困りますが……（笑）。

山内 こうした大山先生の感性は、臨床医として患者さんと接しているうちに、磨かれてきたのでしょうか。

大山 医師としてのあり方については患者さんに教わりましたね。大学の先生方からは、知識や技術を教わりました。さらに、患者さんと接しているなかで、新しい知識や技術を「こうしたらいいのかな」と確認することができました。患者さんが医師に面と向かってものが言えるような付き合いがないと、医師として現在の域を超えることはできません。

山内 「全部自分に任せろ。余計なことは言わない」という医師ではないですね。

大山 論外ですね。病理学で、3大兆候というものがあります。「赤くなる」「腫れる」「熱がある」が重要な兆候です。入れ歯などでは、歯茎が赤くもなければ腫れてもいない、しかし患者さんは痛がつているということがあります。多くの医師は、「そのうち慣れますよ」と言いがちです。それではいけない



日本のリーダーが語る
世界競争力のある人材とは？

一橋大学長

山内 進

山内 進（やまうち・すすむ） 1949年北海道小樽市生まれ。1972年一橋大学法学部卒業。1977年同大学院法学研究科博士課程修了。1987年博士（法学）取得。成城大学法学部教授、一橋大学法学部教授、法学部長、理事等を歴任。2004年、21世紀COEプログラム「ヨーロッパの革新的研究拠点」の拠点リーダーに就任。2006年副学長（財務、社会連携担当）、2010年12月一橋大学長に就任。専門は法制史、西洋中世法史、法文化史。『北の十字軍』（講談社）でサントリー学芸賞受賞。その他『新ストア主義の国家哲学』（千倉書房）、『掠奪の法観念史』（東京大学出版会）、『決闘裁判』（講談社）、『十字軍の思想』（筑摩書房）など著書多数。

いのです。どうしても痛がるのか、患者さんの身になって考え、自分で対策を編み出さなければいけないのです。まさに、患者さんが先生なんですね。謙虚な姿勢で臨まなくては、教科書である患者さんが見えなくなってくるのです。

「人知らずして慍らず」 大学広報の「見える化」

山内 私も先生と同じように高校に入ったときに下村湖人の『論語物語』を読んで以来、論語好きになりました。先生が論語を引いて書かれているメッセージはすばらしいですね。誰のためでもない、患者さんのため。人に認められなくとも、自分で切磋琢磨していればいい……。一方で、卒業生からは、大学は自分たちだけがきちんとやっていけばいい、みんなわかってくれるという時代ではない、どんどん宣

伝しなさい、とよく言われます。こうした意見とのバランスをどうお考えになりますか。

大山 確かにギャップがありますね。国立大学法人は税金をいただいて運営していますから、どういう人材を育成しようとしているのか、社会に還元できるどんな研究をしているのか、地域にどんな貢献をしているのかを示さなければなりません。これが最低の義務です。また、国際交流では、自分たちの実績や、やろうとしていることを外に出していかないと理解されません。今、大学の広報の対象はいったい誰なのかを議論しているところです。対象は、患者さん、文京区民、受験生、教職員……それぞれに向けた一番いい方法はどんな手段なのかを議論しているのです。対象に見合った訴え方が必要になります。税金を使っている国立大学としては、自分たちがいかに社会に貢献しているかを「見える化」しないといけないですね。

山内 学生個人にとっては、人知れず自分で勉強することは重要だと思います。しかし、組織としては、表に出していくことが求められるということですね。これまで大学広報誌『H・Q』で多くの方と対談してきましたが、みなさんが「自分のことだけを考えて仕事をしたいけない」「もっと高いもののために仕事をしたい」ということを語ってくださいました。私もそうだと思います。けれど、そのアピールがなかなか難しい。

大山 そうですね、単なる自慢に終わってはいけないと思います。昨年読んだ竹内政明さんの『名文ど



ろぼう』という本に、井上ひさしの言葉がありました。特別な職業が3つある、それは医者と学者と、易者だということです。どれも自分の意見で人の生き方を変えることができるというわけです。学生との懇談会では、「人の生き方を変えるかもしれないほど責任の重い仕事だ。そこをよく考えて勉強するように。言葉が人を生かしも殺しもするわけだから、患者さんとは職人の心を持って接するように」と言っています。また、その本にアメリカの映画の話も出ていました。料理人が病気になるたとき、医師に「私はどれくらい生きられますか？」と聞いた



のです。すると医師は、「あなた次第です」と答えました。すると患者は、「あなた次第でなくてよかったですよ、先生」と言ったのです。自分の命が先生次第では困る、患者にそう言われるような医師になるなど、学生にはよく言っています。医療人としては心したい話ですね。

これからアジア圏をアカデミックプラットホームに

山内 大学の役割は、教育と研究にあります。医学や歯学という最先端の研究には多くの資金がかかることと思いますが、特に力を入れているのはどんなところですか。

大山 現在、COEが2つ、グローバルCOEを1つ獲得して研究しています。東京医科歯科大学では、個々の先生方にすばらしい研究力があります。しかし、今の世の中は一国一城^{あるし}の主では不十分な時代です。複数の分野で複数のフィールドを専門とする先生が、5年、10年というチームの大きなプロジェクトに立ち向かっていくことが重要なのです。優秀な研究者を集集する必要があります。

私もそうですが、多くの研究者はアメリカやヨーロッパで勉強してきました。しかし、これからはアジア圏に教育、研究の拠点を置くべきだと思います。アジア圏が重要なアカデミックプラットホームといわれるようにしたい。東京医科歯科大学では医療系でアジア圏プラットホームの担い手の一つになれるようにバンコクに教育研究拠点を作りました。

また、それとは別に、医学部の学生をトレニン^グとして、主任教授の推薦を得た学生を、ガーナの野口英世記念医学研究所に4人、チリに6人を数か月

間派遣しました。常駐の研究者が異文化のなかでどういう仕事をしているか、異文化のなかの医療とは何なのか、常駐の研究者が若い研究者をどう教育しているか、それを見てくるように言っています。継続的に行うことで、国際人が育つのではないかと……。年間41人の学生を海外に送り出していますし、大学院生も海外研究奨励賞として、若干名派遣しています。最近の若い人は内向きだといわれますが、手を挙げる学生が多いので安心していきます。

山内 本学では、一橋大学海外派遣留学制度という支援制度があり、今まで800人近い学生を海外へ派遣しています。来年度は、院・学部を含めて57人を派遣する予定です。ほかにも留学に関しては手厚いサポートをしていますから、かなりの数の学生が留学していますが、もっと増やしたいと考えています。

大山 留学としては、ハーバード大学には医学部の学生8人、インペリアルカレッジには4人派遣しています。

山内 それを聞くだけで、東京医科歯科大学の教育水準の高さがよくわかりますね。

大山 大学院大学ですから、もっと大学院生にも留学を推し進めていきたいと思っています。研究所への派遣も枠を広げて、行きたいところへ行かせてあげたいですね。

山内 本学では、留学先はどうしても欧米が多くなりますが、受け入れ留学生は逆にアジア圏からが多いですね。一橋のビジネススクールICSでは、韓国のソウル大学、中国の北京大学などとコンソーシアムを組んで、交流しています。

大山 私はタイ語も話しますから、個人的にはタイの無歯科医村で仕事をしたいという夢があります。向こうの言葉で挨拶ができると、ちょっと違います



日本のリーダーが語る
世界競争力のある人材とは？

ね。ところで現在、アジア圏22か国から約160人の留学生を迎え入れています。例えば、区民を巻き込んで彼らに会話教室・お国自慢をさせたらどうかと考えています。言葉を教えつつ文化も伝えていく——アジア文化を発見する雰囲気、市民を巻き込んで醸成していきたいのです。

山内 一橋大学には66か国から留学生が来ています。四大学連合^{*1}の学長が集って、留学生と地域交流について話し合ってもいいですね。

社会の求める医療に応える 医歯学融合教育

山内 大学のあり方については、どうお考えですか。



大山 歯科大学が全国に29ありますが、問題になっているのは歯科医師の過剰感があることです。また、歯学科の定員割れなどもあります。そんななかで、大学はどのような方向に向かっていかなければならないのか、歯学教育はどうあるべきか。悩ましい問題です。医学部では高齢者医療の問題があります。4人に1人が高齢者で、また、そうした患者さんは多くの病をかかえています。つまり、自分の専門だ

^{*1} 21世紀を迎え、グローバル化された社会において、真に国際競争に耐えうる研究教育体制を確立することを基本的理念とし、2001年に東京医科歯科大学、東京外国語大学、東京工業大学及び一橋大学で結成された大学連合。

けでは1人の患者さんに対応できないのです。さらに、口腔内の健康と全身疾患との関係も指摘されています。そこで、2011年度から医学と歯学の融合型教育をスタートさせました。

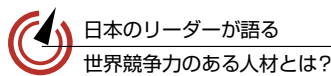
医師に欠かせない倫理学を6年間を通じて徹底的に教育し、医療統計を専門実習修了後に履修するようにするなど、6年一貫型のカリキュラムを作りました。医学や医療は進歩していますから、基礎分野は早いうちに教育し、社会が求める医療に対応できるようにしたのです。モデルカリキュラム作りは「歯学融合研究センター」が行い、つねにカリキュラムのあり方を見直していきます。

山内 そのような環境で学んだ東京医科歯科大学出身の先生に診てもらったことができたなら、患者さん大変安心できるでしょう。

両大学のコラボレーションで 安全・安定・安心の社会づくり

山内 ところで、先生の目から見て、医療分野にはどのような未来が広がっているとお考えですか。

大山 四大学連合を組んでいる一橋大学の学生にぜひお願いしたいことがあります。私たち医療人は、生死に近いところで医療に取り組んでいます。医師としての知識や技術を磨き、患者さん一人一人の



日本のリーダーが語る
世界競争力のある人材とは？

ティーラーメイド医療を実現しようと頑張っています。では、それを社会にどう還元するか？一橋大学の学生は政治や経済、法律などを通じて社会の安定と安心を築くための勉強をしています。医療をどのように社会に展開していくかという点では、一橋大学の先生方や学生のほうが長けています。医療とはどういうものかについては、東京医科歯科大学で学び、それをどう社会に展開していくかは一橋大学で学ぶ。そうした関係づくりをお願いしたいですね。

山内 スケールが大きな話ですね。社会のシステムのなかに医療をどう組み込んでいくのがベストなのか。どうすれば、みなさんが安心して暮らしているのか、という話ですね。医師は個人が対象なので、その対応にベストを尽くす。しかし、医療にかかわる社会的な問題もあるわけですから、確かにわれわれの立場から考えていく必要がありますね。頑張らなくてははいけません。

大山 私たちは安全と安心で社会に貢献したい。一橋大学には安定と安心の機構づくりを考えていたのだと、社会構築には医療サイドはどうあるべきかが明確になってきます。つまり、社会の安定のために医療サイドはどのようにすればいいのか、医療教育はどのようにあるべきか……四大学が連携を強めることにより、研究・教育も含めて再構築していくことができます。

山内 現在、四大学連合の複合領域コース^{*2}として「医療・介護・経済コース」などがありますが、もっと大きな視点で考える必要がありますね。

大山 今すぐにということではなく、そうしたステップを踏んで学んだ人が、指導者として世の中の仕組みづくりをリードしていったほしいと期待しています。

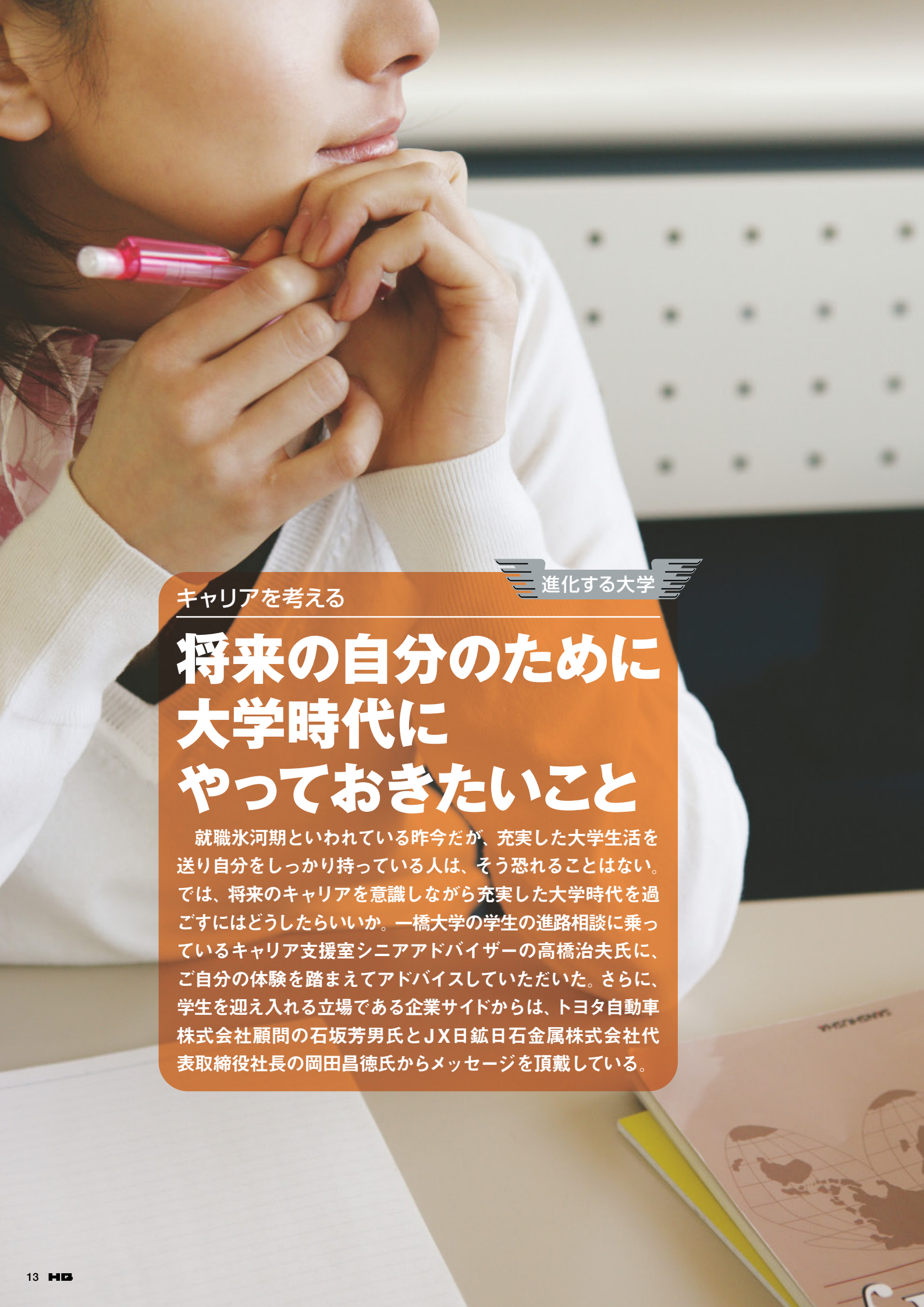
山内 その意味では、一橋大学の学生が東京医科歯科大学に来て学び、自分の頭で、社会における医学のあり方を考えていくことには意味がありますね。

大山 ええ。すべての学生にそうしてほしいとまではいいませんが、国や地域の政策に活かしていきたい。そのような人材が、何人が現れてほしいと思っています。そういうことを考えながらやっていかないと日本は沈没してしまいます。

山内 一橋大学は社会科学の総合大学ですから、体系的な発想は前面に出てきません。大学の性格上、広い意味での社会をどのように良くしていくかというコンセプトがあります。社会にはいろいろな局面があります。医療ももちろんです。そこでは、医療分野のトップクラスの大学と一緒にさまざまなことを行うことは、刺激になりますし、視野が広がります。これからも互いに刺激し合いながら、先生の言葉を借りれば、安全・安定・安心の社会づくりに貢献していかなければなりません。本日はどうもありがとうございました。



^{*2} 1大学では提供できない教育内容を、四大学連合を構成する大学が提供し合うことによって可能とし、これまでの高等教育機関が育てることのできなかった新しい人材を育成することを目的に、2002年に設けられた、特別履修プログラム。



キャリアを考える

進化する大学

将来の自分のために 大学時代に やっておきたいこと

就職氷河期といわれている昨今だが、充実した大学生活を送り自分をしっかり持っている人は、そう恐れることはない。では、将来のキャリアを意識しながら充実した大学時代を過ごすにはどうしたらいいか。一橋大学の学生の進路相談に乗っているキャリア支援室シニアアドバイザーの高橋治夫氏に、ご自分の体験を踏まえてアドバイスしていただいた。さらに、学生を迎え入れる立場である企業サイドからは、トヨタ自動車株式会社顧問の石坂芳男氏とJX日鉱日石金属株式会社代表取締役社長の岡田昌徳氏からメッセージを頂戴している。

人と会うこと 話を聞くこと 友だちになること

人の経験を自分のものとして取り込む

まず言いたいのは、できるだけたくさんの人に会ってもらいたい、ということ。仕事とは人に会うことと言ってもいいでしょう。大学には先輩もいれば、友人、後輩、社会人のOB/OGもいます。そうした人たちと、意識的に付き合っていくことです。卒業生たちの集まりである如水会はいつでも在校生を歓迎する態勢をとっています。こうした人との付き合いの中で、ぜひ、人の話を聞くこと、友だちになることを意識してほしいと思います。「こいつはダメだ」ではなく、「この人は何々ができる」といいところを見ることが、結局は、自分の視野を広げることにもつながるからです。



クラブ活動では上下のつながりが生まれます。一橋大学では、伝統的に卒業生がクラブと深く関わっています。学生にとっては40代、50代の卒業生たちは遠い存在かもしれませんが、卒業生たちにとっては後輩である学生は近い存在なのです。自分たちを身近な存在と感じていることを理解して先輩たちに接していけば、人間関係の輪がさらに広がっていきます。人と会うことによって、その人の経験を自分のものとして取り込んでいく。そういう気持ちで人と会うことが重要

キャリア支援室
シニアアドバイザー
高橋治夫氏



です。自分の未来を切り開くのは人と会うことだと考えてください。

私は、サラリーマン時代に、人事課に頼まれて学生の面接を担当したことがあります。その時人事から言われたのは、「自分の部下として採用したい順番をつけてください」ということでした。面接では、会って40分話しているうちに、この人間と一緒にやっていけるのか、相手は心を割って話しているのか、人生や生き様について考えているのか……などを見るわけです。こう見られていることも心にとめておくことです。

仕事に使える語学力は1年半で身に付く

私は、1973年に三井物産に入社。80年からエクアドルに6年間駐在しました。赴任する時に、「スペイン語ができなくとも英語で仕事ができるから、すぐに行け」と言われて、「そうかな」と思って赴いたわけです。確かに仕事は英語でできます。しかし、人間関係を作らずに仕事がうまくいくことは、ほとんどありません。英語では、現地の人と一緒にエンジョイできず、慌ててスペイン語の勉強をしました。半年勉強すれば日常会話はできる。1年半やれば仕事にも使えるようになる、ということがわかりました。

台湾から来たある女子留学生は、よくしゃべります。彼女は、「私の日本語はおかしいので、人の倍しゃべらなければならない」と言っていま



した。確かにそうです。私もスペイン語を勉強している時はそうでした。正しく話せるようになろうと思う前に、まずは、間違うことを恐れずに慣れることだと思います。

ちなみに、語学の壁をうち破るには留学することです。留学するとそれまでは英語ができていたつもりでも、自分の英語が通じないことや、生活上のさまざまな困難を経験します。それがいいのです。人間を一回り大きくしてくれます。

人に会えば道が開ける——が信念

1982年エクアドルは外貨不足のため自動車、建設機械など多くの輸入品を制限しました。私は仕事がなくなり、帰国するか新事業の開拓か、という選択を迫られました。輸入禁止にならなかったのは食料、薬、医療器械です。全く経験のない仕事ですが、エクアドル国内の業界の皆さんを訪ねて相談しました。そして医療器械の輸入・販売を開始したのです。商品と資本があれば、仕事のやり方は現場にあることを会得しました。まずはその国のやり方で始める。そして日本流を取り入れ、さらに自分の独創を加えていきました。

1986年にいったん帰国し、その後1989年にはチリに新会社を設立して社長になるなど、いろいろなことを体験しました。自分の経験を通して言えることは、「いい人に会えばいい仕事ができる」ということです。突然の異動命令に驚かずにいられたのは、「人に会えば道が開ける」という確信があったからです。ある国では年に150日ゴルフをやつて、一部から不評を買いました。次に社長になった人はゴルフをしない人でした。すると、これまでゴルフ三昧ながら黒字だった会社が赤字に転落しました。私はゴルフをしながらオーナーたちにクルマを10台、20台と売っていたのです。ショールームで売れるのは、1台ずつですから。仕事は人が動かすもの。そんな信念を持ちながら、学生たちにキャリア指導を心掛けています。

「就職活動体験記」「就職の手引き」の活用を

キャリア支援室の平成21年度の相談件数は、2058件でした。3、4年生の約7／8割がキャリア支援室を使っています。一橋大学の学生の大多数は、キャリア支援室を上手に利用して、問題なく就職できています。就職対策も「就職活動体験記」と「就職の手引き」を読むだけで自らキャリアを切り開ける学生たちが沢山います。むしろ課題は、キャリア支援室に関心すら示さない学生たちだと思います。

キャリア支援室は、学生が依存するところでも駆け込み寺でもありません。就職活動を前に、自分が生きてきた年月を整理し、確認する場所です。ですから、1、2年次こそ、しっかりと自分を見つめ直し、時にはキャリア支援室を活用しつつ、これからの4年間の過ごし方について考えてほしいと思います。(談)



◆キャリア支援室の主な業務

- ・キャリア教育支援業務
- ・進路・就職相談支援業務
- ・キャリア支援行事を実施
- ・就職データの統計表作成
- ・印刷物の刊行
- ・キャリアデザイン委員会の支援
- ・就職情報の提供
- ・その他



友だちづくりで視野を広げ、人生の目標を探そう



トヨタ自動車株式会社
顧問

石坂芳男氏

如

水会館では例年、新入生の歓迎会を行います。そのとき私は、卒業生組織如水会の評議員会長として次の3点を語っています。まず第1点は、大学生生活の中で多くの友だちをつくること。絶海の孤島のロビンソン・クルーソーであってはいけません。全国から集まっている異なった経験を持った人と友だちになることで、相手を理解するとともに、自分を見つめる機会にしてください。第2点は視野を広げること。運動部や文化部、クラス会、ゼミなどを通じて視野を広げることです。海外留学もいいでしょう。第3点は、人生の目標を見つけること。自分がどういう道を進んでいこうとするのかを考えることです。

私自身は、東京生まれの東京育ちで一橋大学に入っていますから、考えてみれば世間知らずでした。地方から来ている学生たちとは感覚がずれていました。彼らは下宿していますから、当時の私と違って独り立ちしていたのですね。しばらく経ってからそのことに気づきました。さまざまな環境の変化を適切に捉えてなじんでいくのは、友だちづくりが一番です。小田急沿線に住む仲間と昭和38年卒のクラス会をやることになったとき、全員が集まりました。日頃は企業というゲゼルシャフトに属していますが、クラスの仲間は利害関係のないゲマインシャフトです。会うと昔の記憶が鮮明に蘇って話が弾みます。

大

学時代は、クラスでもゼミでもいいですから、どっぷりと浸かって4年間を過ごしてほしい

人

生の目標を探すきっかけになるのが、一つは勉強であり、もう一つは趣味になります。私は、根っからの自動車好きで、大学時代の所属クラブは自動車部でした。日本中を走ってやろうと夏季遠征を実行し、全国の如水会支部にお世話になりました。こうした行動を通じて絆が深まり、人生のかけがえない仲間ができました。

当時、自動車産業は黎明期で、大卒初任給は各業界の中でも最低クラスでした。それでも、「これから伸びる業界だ」と確信して、飛び込んだわけです。好きな自動車だからこそその決断です。お陰で、次第に国際競争力を付けて海外発展していった業界で自分も成長できたという大きな満足感を得られました。

そして、新入生の皆さんや一橋大学への進学を考える皆さんには、ぜひ、卒業生同窓会が主催する如水ゼミ（キャリアゼミ）や社会実践論の講座などを目を向けてもらいたいですね。さまざまな業界でリーダーシップを発揮している卒業生から、将来のキャリアについて学べる、一橋大学ならではの授業なのですから。（談）

◆石坂芳男（いしざか・よしお）

1963年一橋大学法学部卒業後、トヨタ自動車販売株式会社（現トヨタ自動車株式会社）入社、1992年取締役、1996年米国トヨタ自動車販売株式会社取締役社長、1999年トヨタ自動車株式会社専務取締役、2001年トヨタ自動車株式会社取締役副社長、2005年トヨタ自動車株式会社相談役、2008年トヨタ自動車株式会社顧問。

JX日鉱日石金属株式会社
代表取締役社長

岡田昌徳氏



長期的なポテンシャルを身に付けるための三箇条

企業は学生の「今あるスキル」には期待していません。「長期的なポテンシャル」に期待しているのです。では、それをどう磨くか。

まず、第一にあげたいのが、若者にはぜひいい意味での「しつこさ」を身に付けてほしいということです。組織の中のプロジェクトには、さまざまな困難がつきものです。仕事は、あきらめたらそこで終わりです。困難に負けないしつこさを身に付けるには、クラブやサークル、もちろん勉強でもいい、必ずやり遂げることです。私は、一橋大学の応援部の活動をやり遂げました。一緒にやりぬいた仲間、一生の宝です。今でも会うと、学生時代に戻って話し合える大切な存在です。何事でもやりぬくことを続けていれば、自然としつこい性格になってきます。

次は、「聞く耳を持つ」こと。仕事にも人生にも挫折はつきものですが、それを救ってくれるのは他人のアドバイスです。また、世の中の状況は常に変わっていますので、社会人には、対応力が求められます。たとえば、誰がリーマンショックを想像できたでしょうか。不測の事態を乗り切るためには、課題を正しく認識する態度が必要です。そのためには、人の意見を聞き、多面的な角度から考えられる能力を身に付けることが重要になります。

聞く耳とは、対話力のことです。多様な人材と友だちになる。ゼミの先生と対話することで考える力を深

める……。一橋大学は小さいですから、濃密な付き合いができます。人との付き合いを通して自分を客観視するような習慣を身に付けてください。

二つ目は「人に対して前向きに関わる姿勢」を自ら育ててもらいたい。私には、ロンドン駐在の経験があり、その頃幼かった子供は頻繁に熱を出し、その度に現地の病院に駆け込んでいました。冷や汗と脂汗をかきながらも必死にイギリス人の医師に病状を説明しました。あのときほどイギリス人の親切さを身に染みて感じたことはありませんでした。カルチャーギャップの不便さを憂う前に、心を開いて相手に関わっていく、そうすることで自分の視野が広がっていくのです。

私は以前、如水会の組織強化委員長として、クラブやサークルの海外遠征サポートを担当していました。その頃から「内弁慶になるな、他国のよいところを見てこい！」という気持ちが強くあります。

当社のお客様を見ても、海外のお客様の比率がかなり高くなっています。少子高齢化社会では、中国や韓国、台湾は内需だと思つて業務を展開していく必要があります。海外で活躍するには、その国のよさを前向きに探し出す姿勢が必要になります。できれば、学生時代に留学など海外経験をしておくことをお勧めしたい。また、キャンパスには海外からの留学生が多いので、それこそ「好奇心」を持って前向きな姿勢で人と関われと言いたいですね。（談）

◆岡田昌徳（おかだ・まさのり）

1946年生まれ。1970年一橋大学経済学部卒業後、日本鉱業株式会社（現：JXホールディングス株式会社）入社。1998年株式会社ジャパンエナジー（現：JXホールディングス株式会社）理事、2001年執行役員電子材料部門長。2002年株式会社日鉱マテリアルズ代表取締役社長、2005年日鉱金属株式会社代表取締役社長、2010年よりJX日鉱日石金属株式会社代表取締役社長。2002年より新日鉱ホールディングス株式会社（現：JXホールディングス株式会社）取締役を兼務。

自分の頭で考え抜くこと

1 自己紹介をかねて

学部3年生になって「ゼミに入れてください」と初めて「教授の研究室」をたずねたとき、「出来合いのテキストを読むより、まず本物に取り組んだほうがいい」と言われたことが、とても印象的でした。松石勝彦教授（現、本学経済学研究科名誉教授）のゼミに入れたとき、マルクス『資本論』第1部の最初の所から（よくわからないままに、ですが）「レジメ」を書いて、冷や汗ものの「報告」をしたのが、勉強の出発点だったように思います。その後、スタグフレーションの余韻が感じられた1980年代前半から、バブル経済が崩壊し始めた1990年代初めまで、大学院生をしていました。

マルクス経済学の分野

では「恐慌論」（たとえば、

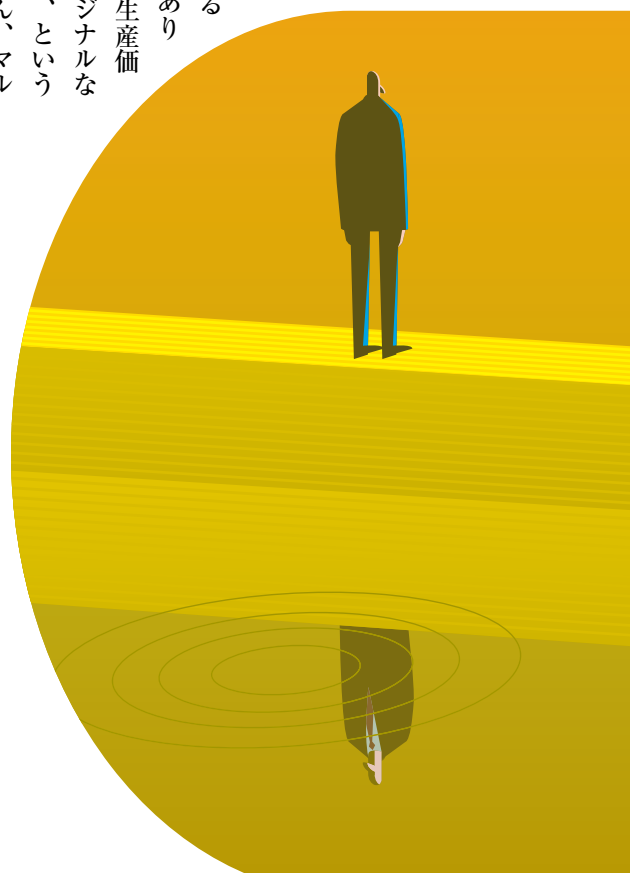
なぜ資本主義経済は周期的な過剰生産恐慌を伴ってしか発展していかないのか、をめぐる議論）に関してすでに多くの研究が蓄積されていましたが、1980年代前半には、先行研究を踏まえつつも、新しい分析視角（たとえば、数理モデルや計量分析）を応用した論文も登場していて、「こういうスマートな議論もあるのか」と興味をそそられました。とはいっても、大学院



に入ったばかりの当時の私には、そのような「新しい分析視角」が提起された理由はいったい何であり、それによって何が明らかになるのか等々について考える能力があるはずありません。そこで、資本蓄積、再生産、利潤、生産価格などの主要論点について、マルクスのオリジナルな議論はどのようなロジックになっているのか、という所から出発せざるを得ませんでした。もちろん、マルクスのオリジナルの議論をめぐっては、色々な立場から論争があります。目新しいものに寄り道しがちな私は、「オリジナルの議論に則して、かつ、自分の頭で考えよ」と、幾度となく、ご指導を受けたものです。他の立場の経済学でもおそらく事情は同じだと思いますが、まずは、「オリジナルの議論」を、どこまで「一貫したもの」と把握できるのかを考え抜くという作業は、やはり欠かせないのではないかと、と今になって痛感しています。

しかし、より具体的な経済的カテゴリー（たとえば、国民経済計算における所得、消費、投資、貯蓄、実物資産、金融資産・負債など）の次元で、「資本主義経済の動態」を分析しようとする場合には、「オリジナルの議論」となる分析視角が「1つだけ」というわけにはいきません。より正確な議論については先行研究をご参照いただいたほうが良いと思います。が、マルクスの理論的カテゴリー（不変資本、可変資

本、剰余価値、賃金、利潤、利潤率など）を、そのままの形で、国民経済計算のカテゴリーに適用しようとすると、色々考慮しなければならない問題が出てきます。具体的な経済カテゴリーの次元で「資本主義経済の動態」を分析する場合には、マルクスの理論を基礎とする場合でも、「オリジナルの議論」となる分析視角がもう1つ（あるいは、それ以上かもしれませんが）必要になると思います。この点を、おぼろげながら考えるようになったのは、大学院の終わりのころになって、国民経済計算のデータを使って「利潤率」とか「分配率」に関する分析を試みたときでした。また、より具体的な経済的カテゴリーの次元における分析視角を学ぶ機会に恵まれたことも、とても幸いなことでした。それは、1986年から1988年にかけて、当時、東京経済大学で教えておられた宮崎義一先生（京都大学名誉教授）に、ケインズ『雇用、利子および貨幣の一般理論』を輪読する大学院ゼミに参加させていただいたことです。実は、先に挙げた「オリジナルの議論を、どこまで一貫したものと把握できるか、考え抜くこと」というのは、宮崎先生からケインズ理論を教わ



ったときに、よく伺った言葉です。もちろん、ケインズ『一般理論』も、1度や2度、読んだだけでわかるような、理解しやすい著作ではありません。マルクスの経済学と並んで、ケインズ（およびケインズを受け継ぐ「ポストケインズ派」）の経済学についても、資本主義経済の基礎的な分析視角を提供する「オリジナルの議論」として、今でも初心にかえって、勉強するように心がけています。

以上のような経緯もあって、マルクス経済学とポストケインズ派経済学を中心とする政治経済学アプローチを「導きの糸」として、貨幣経済の特質、資本蓄積と所得分配、労働過程と雇用、金融の不安定性などのテーマに取り組んでいます。

2 「政治経済学（political economy）」から 見えてくるもの

学部教育科目「市場と社会」を例に

最初からとりとめもない「自己紹介」になってしまいましたが、政治経済学アプローチなるものの観点から、どんな議論ができそうなのか、現在担当している学部教育科目を例にとって、簡単にご紹介したいと思います。2002年度から、経済学研究科の水岡不二雄教授と共同で「市場と社会」という科目を開講しています。水岡教授と私、計3名の担当者により、3つのパートからなる講義を行っています。2010年度の「市場と社会」では、現代経済を色々な形で方向づけている「新自由主義」レジームの問題点とは何か、「新自由主義」の根本にある経済・社会の見方（特に、経済学）はどのようなものか、「新自由主義」レジームに対するオルタナティブは考えられないのか、といっ

た問題意識を共有しつつ3名の担当者が、それぞれの専門分野の観点から講義を行いました。「市場と社会」は必修の科目ではありませんが、履修する学生は割と多く、とても興味深く鋭い質問を寄せてくれる学生もいます。

私は、「市場」と「社会」の関わりあいについて従来の経済学（もちろん、私が勉強してきた学説に限ったうえで）の話ですが、がどのように考えてきたかについて、自分なりに解説するように努めています。たとえば、「賃金」という経済的カテゴリーに注目してみましよう。「賃金」とは何か？と問われたとき、それは「労働の価格」だ、という答えは、けっして間違いではありません。「労働の価格」というカテゴリーが現実に通じているからです。しかし、ここで話を終わりにしてはならないと思います。「労働の価格」の背後には、「雇う側」と「雇われる側」という互いに異なる立場の人々のあいだに社会関係が潜んでいますし、「賃金」という経済的カテゴリーそのものに内在する問題点とは何かについても、もう少し掘り下げて考える必要があります。現実の経済では、たとえば、「1時間機能する労働力の価値」というカテゴリーではなく、「1時間の労働の賃金」（つまり、「時給〇〇〇円」というカテゴリー）が通用しています。政治経済学アプローチなるものは、けっして「賃金」という実際の経済的カテゴリーを否定したり、これを「廃止せよ」と主張したりして

「金」というカテゴリーが通用している現実の経済では、「労働力の再生産」（簡単に言いますと、雇われている人々の生活の維持）すら保証しない賃金形態も堂々とまかり通っています。それゆえ、「賃金」というカテゴリーを用いる経済では、人々の生活の再生産を確保するための何らかの社会制度が必要となります。しかしながら、ここ10年ほどの現状を見ると、雇用形態の多様化（特に、いわゆる「非正規雇用」の拡大）に伴って、「雇う側」の人々は「他人から働きぶりを引き出す権限」を「よりフレキシブル」な形で確保している一方で、「雇われる側」の人々のなかには、かりに「賃金」を得る機会に恵まれたとしても、将来にわたる人生設計が立てられないだけでなく、日々の生活を維持することすら困難な状況におかれている人々がおおぜいいます。こうした厳しい現実をめぐって、さまざまな立場からの議論がすでに行われていますが、「賃金」という経済的カテゴリーそのものを根本的に考えてみることも必要ではないかと思っています。

もちろん、「市場と社会」の講義では、以上のような「賃金」をめぐる話だけでなく、世界経済の現状に至る歴史的経緯とか、世界経済の今後のヴィジョンに関わるようなテーマも扱われています。2011年度も、通常の教科書とは少し違った角度から経済・社会を分析するためのオルタナティブな見方を皆さんに提案できるのではないかと思います。

経済学研究科教授

石倉雅男

(いしくら・まさお)

1983年一橋大学経済学部卒業、1986年同大学大学院経済学研究科修士課程修了（経済学修士）、1990年同大学大学院経済学研究科博士課程退学、2005年一橋大学博士（経済学）取得。1990年～1992年東京都立大学経済学部助手、1992年一橋大学経済学部専任講師、1995年同大学経済学部助教授、1998年同大学大学院経済学研究科助教授。1998年～1999年ケンブリッジ大学政治経済学部客員研究員、1999年～2000年マサチューセッツ大学アマースト校経済学部客員研究員。2006年より一橋大学大学院経済学研究科教授。主な研究テーマは貨幣経済と資本蓄積・所得分配に関する現代政治経済学の諸理論、ポストケインズ派経済学の蓄積・分配理論に基づく実証分析、市場経済と制度に関する政治経済学アプローチ。



会計学らしくない会計学!? 経営者に不可欠な「会計力」を育みます

会計学というより

経営管理と会計の交差点を学ぶ

会計のイメージが変わった——私の授業を受講している学生からよく言われる言葉です。では、どんな会計を指導しているのか。会計の数字を扱うというより、経営者が数字や情報を使って、いかに判断を下していくかを追究しています。経営管理と会計の交差点のような学問といったらいでしょうか。

例えば、一般には会計でこういう数字がでたら、こういう意思決定をすべきだ、というように考えがちです。しかし、経営場面で重要なのは、数字を使いこなすことです。つまり、何か事を行うときに、それに合わせて情報を収集し、数字をつくって意思決定に結びつけていくことです。

ですから、授業の最初に学生に言っているのは、「この授業で公認会計士になれると思ったら、それは間違いだ。どうやって公認会計士を使うかを教える授業を行う」ということです。細かい会計の数字は専門家に任せて、あがってきた数字に振り

回されたりしないようになるための基礎を学んでもらいたいのです。

会計士とは違う

経営者に必要な「会計力」

会計士には経営者と違った独自の視点がありますし、専門家として精緻に数字をつくるため、大局観を見失ってしまうこともあります。そうした価値観に惑わされないで、数字を見分ける技術といってもいいでしょう。さらにいえば「こういう視点で数字をつくってほしい」と指示できる能力を磨かなくてはなりません。会計の技術そのものではなく、会計の裏にある組織の仕組みを見抜く力、これを私は「基本的な会計力」と考えています。経営者には、こうした能力が不可欠なのです。大きな視点で会計を見て、必要な数字を専門家につくってもらえばいいのです。

具体的な言葉で考えることも重要です。ケースを考えるにあたっても、抽象的ではなく、具体的な言葉を使って、具体的な事例で説明できるようにすることを学生には期待しています。例えば、活動基準原価計算(Activity-based costing)とか、バランス・スコアカード(Balanced scorecard)など、いかにも最新の会計用語を入れることによって抽象的に語ると、何となくわかったような気がしてきます。しかし、

具体的な中身は何もありません。だからこそ、「なぜこの数字で意思決定ができなかったか」といった具体的なケースで考えることが重要なのです。

会計と経営の融合に必要な 二つの条件

会計の世界は一種独特で、会計士の連帯感企業を超えて強く結びついていて、経営者には立ち入れない面があります。それをいかに経営につなげていくか、言い換えれば会計と経営の融合はどうしたらいいのでしょうか。

第一には、やはり経営者一人一人が「会計力」を備えて、会計の数字を使っていくことです。第二には、抽象的な言葉に振り回されずに、会計を使うことで何がどう変わるかを具体的に想像する力を持つことです。

グローバル化している現在ですが、会計の数字は国境のないコミュニケーション手段でもあります。これにより、文化や価値観の違いを乗り越えることができます。だからこそ、会計そのものが理解しづらい独自の言語になってはいけません。みんなが数字を理解し具体的に物事を捉えることで、会計が対話の道具となり、さまざまな壁を乗り越えていくことができます。

組織を見る「共通の窓」として 会計を考える

会計学といいながら会計の細かい数字にこだわらない、という発想が生まれたのは、もともと会計畑の出身ではなく実務経験があったからだと思います。

私は、三菱総合研究所に6年間勤務していましたから、最初は会計をやるつもりはまったくありませんでした。むしろ敬遠していたといってもいいでしょう。ところが、アメリカに留学したときに、組織を見ていくためには「共通の窓」のようなものが必ずやだと思えるようになってきました。企業を理解する道具としては、予算があり、会計のさまざまな数字があるということで、あくまで会計は組織を見るための手段として考えていました。

アメリカで考えたのは、アメリカ企業は統一された数字を全社で持つていて、それを使って何でも意思決定をしているということです。これに対して、日本企業には数字で意思決定をするという文化がないというか、意識が薄い。統一の会計システムがあるというより、それぞれのセクションが個別に数字を持ち、それぞれが都合のいいように使っているようです。

赤字商品は切るだけでは芸がない いかに乗り越えるか考えよう

赤字商品があった場合の数字の解釈には二つあります。一つは、赤字という数字がでているのだから、その商品はもうだめだという判断です。もう一つは、会計は価値観の表れだからその数字のほうが間違っているという解釈です。アメリカでは、ある商品が

赤字だとすると、ドライに取り扱いを止めてしましますが、日本の場合はその商品が赤字なのは数字の間違ひではないかと考えやすい傾向にあります。その商品に対する思いや愛着から数字をつくり直すこともありがちです。

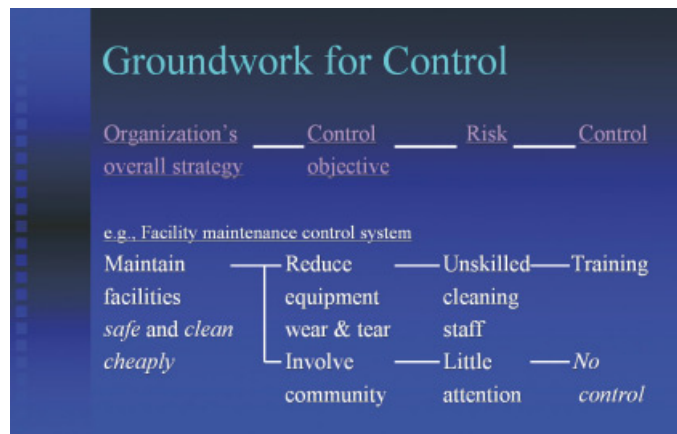
こうした文化の違いを乗り越えるには、「この商品は数字で見ると赤字なんだ」ということを認めて、それをどう乗り越えるかと考えること

でしょう。アメリカのように何でもかんでも赤字なら切ってしまうというのも問題です。企業のアイデンティティに関わるような商品が赤字だった場合、その商品を維持するためには、現在の赤字の状況とアイデンティティを守るためにどれだけの費用をかけられるのかを、冷静に分析しなければなりません。

ふわつとした文化や感情から

本音を引き出す法

突然変異のように会計の世界に入ってきたわけですが、特定の視点から組織を理解できるようにするのはよかったと思います。



会計と経営とを結びつけるマネジメント・コントロールの基本的な枠組み

ふわつとした文化や感情を理解するためには、きつちりとした尺度が必要になります。それがあつたら、わかりやすいものでも客観的にわかつてくるのです。抽象的なやわらかい言葉を使っているのは、広がりがあるためにそれぞれが勝手に違った解釈をしていても、変に納得してしまいます。しかし、「このとき予算が達成しなかったのはなぜか」と数字を使って質問すると、それぞれが違った考え方をしていたり、同じ考えだつたりしたことがわかつてきます。実際の数字を持ち出して質問すると、本音がでてきやすくなるのです。

アメリカの大学で教えているときに、リーマンショックに端を発した金融危機がありました。オバマ大統領が「アメリカ経済を救いたい」といえば、みんなが賛成します。しかし、リーマン・ブラザーズの救済に国費を投じないといった具体的な話になつてくると、それぞれの考え方や信念の違いが明らかになってきます。同様に、はつきりした尺度があれば、企業組織の背後にある本音も見えてくるのです。つまり、一見かたい会計の数字をどう使うかによって、かえって企業のやわらかいスタイルが浮き彫りになるのです。

会計の研究をやつていて思うのは、やはり個々の企業によつて違いがある、組織文化の色があるということです。会計というのは、規則に従つて数字をつくるものではなく、その背後に組織をどう運営していくかという思いが込められているのです。その思いが違えば、違う数字がでてきても当然なのです。(談)

国際企業戦略研究科
准教授

古賀健太郎

(こが・けんたろう)

研究テーマ「会計情報が意思決定に与える影響」
1993年コロンビア大学経営管理研究科修士修了、1999年ハーバード大学経営管理研究科博士修了。1985年～1991年三菱総合研究所、1998年～2001年早稲田大学商学部助教授、2002年～2009年イリノイ大学会計学科助教授。

文化系クラブによる

三商大交流

三商ゼミ
50周年
三商大戦
60周年
特集

第二次世界大戦以前、一橋大学、神戸大学、大阪市立大学は、
三商大（東京商科大学、神戸商業大学、大阪商科大学）と呼ばれ、交流が盛んでした。

HQでは、28号で運動部の交流（三商大戦）、
29号でゼミナールの交流（三商ゼミ）をレポートしてきました。

しかし、3校の学生間交流は、運動部やゼミに限ったものではありませんでした。

今号では、情報提供にご協力くださった写真部と
男声合唱団の三商大交流についてレポートします。

独自の歴史と伝統をもつ クラブ間の三商大交流

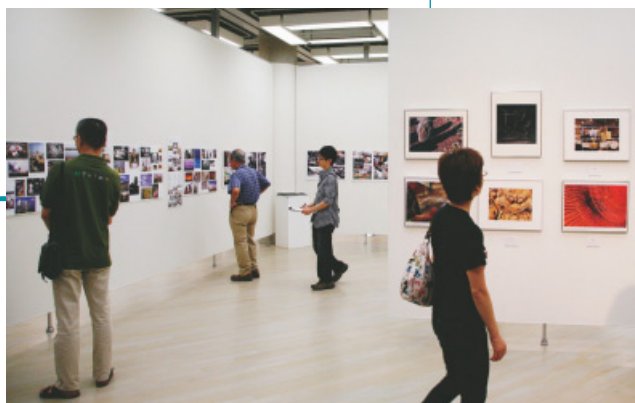
2010年2月、一橋大学、神戸大学、
大阪市立大学の3大学の間で、新たに教
育交流協定が締結されました。

この3大学は、戦前の高等商業学校を
祖とし、大正後期から昭和初期にかけて
商科大学に昇格した経緯をもっているこ
とから（東京商科大学→一橋大学、神戸
商業大学→神戸大学、大阪商科大学→大
阪市立大学）「三商大」と呼ばれ、3大
学間の学生たちは盛んに交流していまし
た。まず昭和初期には、剣道部、野球部、
水泳部、陸上部などの運動部の交流がス
タートし、1942年には、初の3大学
合同の総合体育大会を開催しています。
この総合体育大会は、戦後、三商大戦
（正式名称「三大学体育大会」として受
け継がれ、2010年に50周年を迎えて
います。一方、現在も「三商ゼミ」と呼
ばれている3大学合同の研究発表会は、

戦後、新制大学に変わってから生まれた
新たな交流活動で、2010年に60周年
を迎えました。HQでは、この教育交流協
定締結を契機として、三商大交流をテー
マに1年間、4号にわたり特集すること
になりました。特集第1回（27号）では、
「三商ゼミ60周年」、「三商大戦50周年」の
足跡を『一橋新聞』の記録をもとに追い
かけました。28号（特集第2回）では、三
商大戦の今と昔を、29号（特集第3回）で
は、2010年一橋大学が主幹校となっ
た「三商ゼミ」をレポートしました。そ
して最終回となる今回は、運動部、研究
発表会以外の三商大交流の一部として、
写真部、男声合唱団（コール・メルク
ール）の活動の軌跡をレポートいたします。
この2つのクラブは、HQ 27号の「三商
大」記事内にて行った情報提供募集に対
し、貴重な情報をお寄せくださいました。



コール・メルクールのOBを中心に結成された男声合唱団
マーキュリー・グリーン・クラブの活動風景。



旧三商大写真展 創立75周年記念展・第60回展の東京展会場風景。

文化系クラブによる
三商大交流

写真部



写真界が目にした 三商大写真展

写真部の三商大交流が始まったのは76年前、1935年の秋です。1933年、東京商科大学（一橋大学）内に写真部「カメラアートクラブ」が設立されました。翌年に神戸商業大学（神戸大学）写真部「写真芸術研究会」が、さらに翌年の1935年には大阪商科大学（大阪市立大学）写真部「カメラクラブ」が設立されました。そして早くもこの年（1935年）の秋に、記念すべき第1回の「三商大写真展」が、東京・日本橋の小西六（後のコニカミノルタ）本店ホールにて開催されることになりました。3大学の写真部の作品

が一堂に会したこの三商大写真展は、当時の格式ある写真雑誌

であった『写真月報』や『アサヒカメラ』などに講評記事とともに展示作品が取り上げられました。その後、東京で毎年1回開催されるようになった三商大写真展はアマチュア写真界をリードする役割を果たすこととなりました。

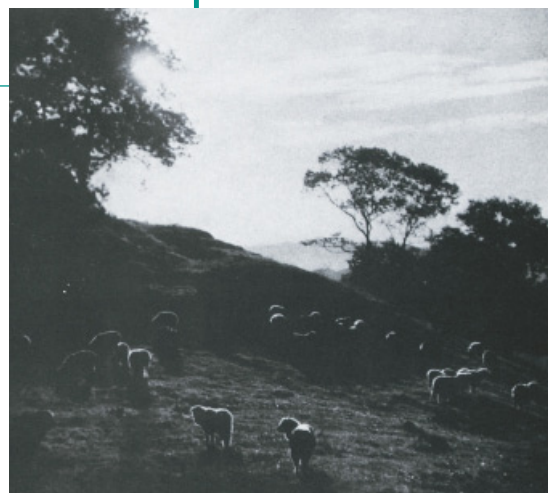
各大学、高等専門学校などの写真部活動が始動した戦前、写真は高価な機材を必要としたため、一般大衆には容易に手の届かない趣味でした。家一軒が1000円程度で建てられた時代に、ライカクラスの高級カメラは1台10000円近くもしたからです。プロフェッショナル



第1回三商大写真展
「カーテン」
小牧太郎氏
（1937年卒）
（『アマチュアカメラ』
1936年1月号掲載）

写真家という職業は未だ存在せず、純粹に作品として撮影を行う学生写真が写真界に大きな影響を与えていたのです。自由なテーマで学生自らが主催する写真展だった三商大写真展は、こうして世間の注目を集めることとなったのです。

しかし、1941年、三商大写真展は、東京・銀座の三越で開催された第7回を最後に、休止を余儀なくされました。日本は、戦争一色になり、写真どころか学生生活すらも危うい時代へと突入していったからです。繰り上げ卒業や学徒出陣といった時代の波にのみ込

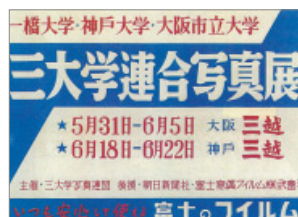


第5回三商大写真展
「牧場の朝」
鵜澤昌和氏（1941年後期卒）
（『アサヒカメラ』1940年1月号掲載）

古書店での「偶然」が導いた 戦後の三商大展復活

歴史から一時期消滅していた三商大写真部の交流は、ある偶然の出来事から再開することになりました。

1952年の春休み、戦後写真部1期生の藤井質文氏（1953年卒）は、神田の古書店街で戦前発行の『アサヒカメラ』を偶然手にとり、その中に掲載されていた東京商科大学写真部員の作品とと



戦後第1回旧三商大写真展
(三大学連合写真展)
関西会場用ポスター（1952年）
資料提供：松田武人氏



戦後第2回旧三商大写真展 個人賞
「たそがれ」 天野文彦氏（1954年卒）

戦後第2回旧三商大写真展 個人賞
「たそがれ」 天野文彦氏（1954年卒）
また5年ごとの節目の年に、各校写真部のOBも参加協力して3校合同の記念事

にも、三商大写真展の存在を知ることになったのです。同じ頃、いくつかの運動部で、三商大交流を再開していたこともあって、一橋大学写真部は、三商大写真展の復活を目指すようになりました。そして同年、大阪、神戸、東京で、ともに三越を会場に、戦後第1回の写真展を開催。旧三商大写真展として、3大学の交流が再スタートしました。

5年ごとに記念展を開催する現在の旧三商大写真展

その後、学園紛争が盛んになった1970年から旧三商大写真展は再び休止します。この休止期間中、写真部の活動は卒業アルバム制作が中心となっていました。しかし卒業生たちからの強い希望もあり、1975年に「旧三商大写真展」は再開、2度復活することになります。以降現在に至るまで、毎年東京、神戸、大阪の3都市で旧三商大写真展を開催しています。



旧三商大写真展
創立75周年記念展・第60回展
東京展の案内ハガキ



旧三商大写真展
創立75周年記念展・第60回展
東京展の会場風景（2010年8月
目黒区美術館区民ギャラリー）



業（記念写真展、合宿、海外撮影旅行）を開催、実施しています。2011年5月14日の、一橋大学ホームカミングデーには旧三商大写真展創立75周年記念展の主要作品を、兼松講堂2階ロビーに展示する予定です。

【出典】

『一橋大学写真部五十年史』
（一橋大学写真部OB会 1988年発行）



文化系クラブによる
三商大交流

男声合唱団



戦後にスタートした 男声合唱団による 三商大交流

男声合唱団の三商大交流が始まったのは、約60年前の1952年のコール・メルクールの新呼称変更と期を一にしています。

まず1949年から1950年頃に、戦中に活動を中断していた一橋大学音楽部が復活を果たしました。その後、1952年にオーケストラのコーラスエクシジョンがコール・メルクールとスマートな呼称になりました。つまり男声合唱団を主体にした三商大交流の歴史は、戦後、新制大学になってから始まったのです。三商大交流の

きっかけは、神戸大学グリークラブ、大阪市立大学グリークラブから一橋大学コール・メルクールへの打診でした。協議の結果、1955年、第1回三商大交歓音楽会が、大阪・産経会館にて開催されました。この時一橋大学からは、指揮者の石丸泰郎氏、部長の山田欽一教授のほか、51人が参加しました。

当時のプログラムには、各大学の学長が交歓会開催を歓迎するコメントを寄せるなど、学内での注目度の高さを窺い知ることが出来ます。この三商大交歓会は、1972年の第18回まで定例演奏会として、3大学持ち回りで運営されていました。

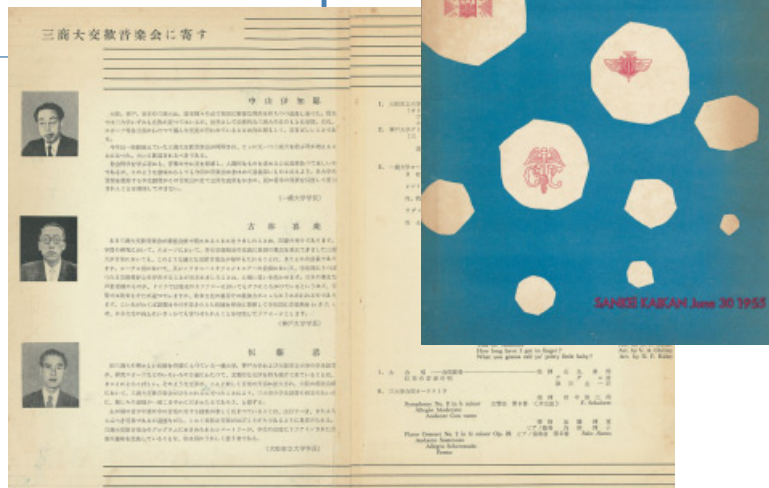
昭和30、40年代に 一大イベントとなった 「三商大交歓会」

コール・メルクールは、三摩摩大学合唱祭や定期演奏会などを主な活動としていましたが、三商大交歓会もまた重要な発表の場となっていました。特に初期の交歓会は、サッポロビール、寿屋（現在のサントリー）といった企業のほか、銀行、証券会社、楽器店などの協賛を得ながら大々的に開催され、クラブ活動の範疇を超える一大イベントだったようです。

しかし1972年の第18回を最後に、三商大交歓会は一時中断す

ることになります。1974年からは、コール・メルクールと神戸大学グリークラブとのジョイントコンサートという形で交流は続きましたが、大阪市立大学を含めた三商大としての活動は一旦休止され、8年後の1982年に復活することになります。

その後、2004年の第39回の開催後、部員数の減少などの理由から再び中断し、2006年に一



第1回三商大交歓音楽会
プログラム（1955年）

コール・メルクールOB会便り (第11号)		発行 昭和55年11月 編集 三商大交歓会 発行所 三商大交歓会
目次		
1 三商大交歓会 活動報告	1	
2 三商大交歓会 活動報告	2	
3 三商大交歓会 活動報告	3	
4 三商大交歓会 活動報告	4	
5 三商大交歓会 活動報告	5	
6 三商大交歓会 活動報告	6	
7 三商大交歓会 活動報告	7	
8 三商大交歓会 活動報告	8	
9 三商大交歓会 活動報告	9	
10 三商大交歓会 活動報告	10	
11 三商大交歓会 活動報告	11	
12 三商大交歓会 活動報告	12	
13 三商大交歓会 活動報告	13	
14 三商大交歓会 活動報告	14	
15 三商大交歓会 活動報告	15	
16 三商大交歓会 活動報告	16	
17 三商大交歓会 活動報告	17	
18 三商大交歓会 活動報告	18	
19 三商大交歓会 活動報告	19	
20 三商大交歓会 活動報告	20	
21 三商大交歓会 活動報告	21	
22 三商大交歓会 活動報告	22	
23 三商大交歓会 活動報告	23	
24 三商大交歓会 活動報告	24	
25 三商大交歓会 活動報告	25	
26 三商大交歓会 活動報告	26	
27 三商大交歓会 活動報告	27	
28 三商大交歓会 活動報告	28	
29 三商大交歓会 活動報告	29	
30 三商大交歓会 活動報告	30	
31 三商大交歓会 活動報告	31	
32 三商大交歓会 活動報告	32	
33 三商大交歓会 活動報告	33	
34 三商大交歓会 活動報告	34	
35 三商大交歓会 活動報告	35	
36 三商大交歓会 活動報告	36	
37 三商大交歓会 活動報告	37	
38 三商大交歓会 活動報告	38	
39 三商大交歓会 活動報告	39	
40 三商大交歓会 活動報告	40	
41 三商大交歓会 活動報告	41	
42 三商大交歓会 活動報告	42	
43 三商大交歓会 活動報告	43	
44 三商大交歓会 活動報告	44	
45 三商大交歓会 活動報告	45	
46 三商大交歓会 活動報告	46	
47 三商大交歓会 活動報告	47	
48 三商大交歓会 活動報告	48	
49 三商大交歓会 活動報告	49	
50 三商大交歓会 活動報告	50	
51 三商大交歓会 活動報告	51	
52 三商大交歓会 活動報告	52	
53 三商大交歓会 活動報告	53	
54 三商大交歓会 活動報告	54	
55 三商大交歓会 活動報告	55	
56 三商大交歓会 活動報告	56	
57 三商大交歓会 活動報告	57	
58 三商大交歓会 活動報告	58	
59 三商大交歓会 活動報告	59	
60 三商大交歓会 活動報告	60	
61 三商大交歓会 活動報告	61	
62 三商大交歓会 活動報告	62	
63 三商大交歓会 活動報告	63	
64 三商大交歓会 活動報告	64	
65 三商大交歓会 活動報告	65	
66 三商大交歓会 活動報告	66	
67 三商大交歓会 活動報告	67	
68 三商大交歓会 活動報告	68	
69 三商大交歓会 活動報告	69	
70 三商大交歓会 活動報告	70	
71 三商大交歓会 活動報告	71	
72 三商大交歓会 活動報告	72	
73 三商大交歓会 活動報告	73	
74 三商大交歓会 活動報告	74	
75 三商大交歓会 活動報告	75	
76 三商大交歓会 活動報告	76	
77 三商大交歓会 活動報告	77	
78 三商大交歓会 活動報告	78	
79 三商大交歓会 活動報告	79	
80 三商大交歓会 活動報告	80	
81 三商大交歓会 活動報告	81	
82 三商大交歓会 活動報告	82	
83 三商大交歓会 活動報告	83	
84 三商大交歓会 活動報告	84	
85 三商大交歓会 活動報告	85	
86 三商大交歓会 活動報告	86	
87 三商大交歓会 活動報告	87	
88 三商大交歓会 活動報告	88	
89 三商大交歓会 活動報告	89	
90 三商大交歓会 活動報告	90	
91 三商大交歓会 活動報告	91	
92 三商大交歓会 活動報告	92	
93 三商大交歓会 活動報告	93	
94 三商大交歓会 活動報告	94	
95 三商大交歓会 活動報告	95	
96 三商大交歓会 活動報告	96	
97 三商大交歓会 活動報告	97	
98 三商大交歓会 活動報告	98	
99 三商大交歓会 活動報告	99	
100 三商大交歓会 活動報告	100	

コール・メルクールOB会便り

【出典】

『第1回三商大交歓音楽会プログラム』

(1955年)

『楽苑 第41号』(一橋大学管弦楽団、
一橋大学コール・メルクール、
如水会音楽同好会／1997年)

【参照】

コール・メルクールOB会公式サイト

<http://merkur-ob.yamadamasahiro.net/>

マーキュリー・グリー・クラブ公式サイト

<http://jfn.josuikai.net/circle/mgc/>

2009年11月29日

第4回三商大OB合唱団交歓会

卒業後にこそ繋がる 三商大交流の新たな形

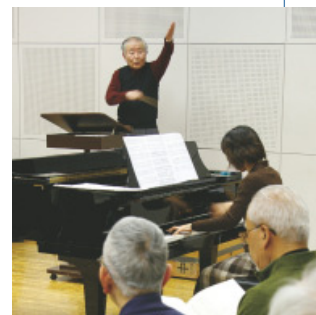
橋大学兼松講堂で開催された第40
回三商大交歓演奏会を最後に、現
在は学内行事としての三商大交流
は行われていません。

三商大の伝統は、卒業生たちに
よって受け継がれています。19
99年に、コール・メルクルの
OBを中心に男声合唱団マーキュ
リー・グリー・クラブが結成され
ました。60人を超える団員を擁し、
毎週木曜日の夜に活動を続けてい
ます。マーキュリー・グリー・クラ
ブは、これまで7回の定期演奏会
を開催しました。2004年には
フランス・プロヴァンスで開催さ
れた「第9回サントボーム国際合

唱祭」にも参加しました。また、2
006年には南ドイツ、2008
年には北イタリア、2010年に
はイギリスへと演奏旅行に出かけ
ています。また、神戸大学グリー
クラブのOB組織「六甲男声合唱
団」や、大阪市立大学グリークラ
ブのOB組織「南濠会合唱団」
とのジョイントコンサートも定期
に行っています。なおコール・
メルクルOBにより組織された
マーキュリー・グリー・クラブで
すが、神戸大学、大阪市立大学の
卒業生に加え、他大学の卒業生
も参加しています。大学の伝統を
OBが守り、人と人を音楽が繋ぐ、
マーキュリー・グリー・クラブ
はこうした役割を担っているよ
うです。



毎週木曜日の夜に行われる
マーキュリー・グリー・クラブ
の活動風景。



一橋大学草創期。

そこには、新しい価値を創らんとする力があった。建設者としての誇りと意志があった。

「Captains」それは近代日本の発展に多大なる功績を残した人々のストーリーである。

学問、国、家業、大学運営……有事のたびに求められた人格。

「Captains」第8回では、矢野二郎の足跡を追ってみた。



堀 進二／作

第8回

矢野二郎

商業教育の礎を築く

一橋の初代校長

矢野二郎は1845年、幕府御家人、富永惣五郎の次男に生まれ、2歳で同じ御家人である矢野家を継ぎました。若くして幕府翻訳官、森山多吉郎に師事、その後、西吉十郎門下生となります。森山と西は翻訳官として特に秀で、西吉十郎には同時期に、三井物産初代社長となる益田孝、私塾共立学舎を創設した教育家・尺振八（せきふりやち）なども師事しています。益田孝は後に矢野の義弟となり、矢野が学内で一橋の商業教育を推進する立場であるとしたら、学外から矢野の教育理念を支えるという立場で、生涯を通じて、深い絆で結ばれていました。

矢野、益田、尺の3名は、外国奉行に勤め、麻布善福寺のアメリカ公使館に赴任します。ここではハリス領事の通訳、立石斧次郎に英語を学びますが、矢野ら3名は自らの英語力不足を痛感し、上司に横浜運上労働務を願い出ます。横浜では直接外国人と折衝することができ、実地訓練の場としては、最適地でした。

1863年、矢野、益田、尺の3名は外国奉行池田筑後守長（なごき）発の渡欧使節団に随行しフランスを訪れ

ています。帰国後の1865年、横浜の陸軍伝習所に入所。矢野と益田は騎兵隊に入隊します。一方、尺は1867年に米国出張を命ぜられています。3人はいずれも幕府のエリートとして成長していきますが、維新後もこの国の土台作りという重要な役割を担っていきます。

幕府崩壊後の1868年、矢野は横浜に自前で翻訳所を開設しました。翻訳所は矢野23歳から27歳の頃、1872年まで続きます。1872年10月には外務省二等書記官に任ぜられ、ワシントン勤務となります。当時の米国公使には、森有礼が初代代理公使として赴任しており、矢野は森の輩下として公私にわたり影響を受けます。

森有礼が商業学校設立の計画を抱いたのは、このアメリカ代理公使時代といわれています。これ以前、幕末期に森はロンドン大学に留学して英国資本主義の繁栄を目の当たりにしており、米国でも南北戦争直後の急速な経済発展を見て、国家独立の基礎は経済の富強にあり、そのためには経済人の育成が急務であることを痛感しました。米国では政治、経済、教育制度を精力的に調査しますが、矢野がこの調査を補佐したのは想像に難くありません。

Captains 矢野二郎

一橋の起源である商法講習所は1875年9月、森有礼の私塾としてスタートしました。

その2カ月後、森が江華島事件処理の外交特命全権公使として北京に派遣され、経営に直接関わるができなくなり渋沢栄一が頭取を務める東京会議所に移管されます。

しかし翌年、この会議所が解散したため、さらに東京府に移管されました。

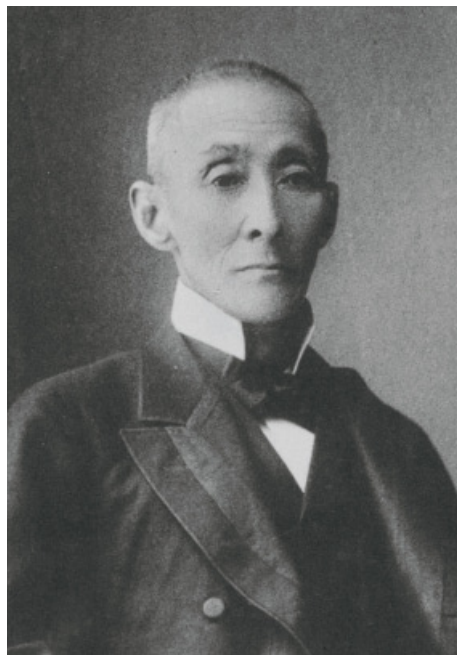
ここで公立学校となり、日本で最初の公立商業教育機関が誕生しました。

そして、この商法講習所所長に任命されたのが矢野二郎です。

一橋135年の歴史のスタートが矢野に託されたのでした。



益田 孝
写真：『東京高等商業学
校卒業記念写真帖
Souvenir Album/1905』
からの転載



矢野二郎
写真：『東京高等商業
学校卒業記念写真帖
Souvenir Album/1905』
からの転載

矢野二郎が日本における最初の商業学校の校長となるのも、この米国赴任が大きなきっかけとなっています。

存続の危機に私財を投じる

1875年9月、矢野は帰国、その後10月に外務省を辞職しました。商法講習所の設立を目前に控え、東京府権知事楠本正隆が講習所所長の人選を渋沢栄一に相談しました。渋沢は益田孝（当時は東京会議所副会頭）に図り、矢野二郎を推薦しました。

1876年8月、矢野は公立学校となった商法講習所所長に就任しますが、設立からわずか2年で思わぬ苦境に立たされます。この年、東京府に府会が成立し、税金の使途は府会の承認が必要となりました。その第1回通常府会に商法講習所の経費予算が提出され、審議の結果半額に削減されたのです。

当時の府会議員の構成は有力富商、華族、地主で、外国人教師が英語で授業を行う商業教育というものに、まったく理解を示しませんでした。東京府下には当時3万人の商人がいましたが、そのうち外国貿易に携わるものは数百人に過ぎず、少数の商人の利益のために府民の税金を使う必要はないと断じられたのです。

矢野にとって、予算半減は想定外の出来事で、このままでは講習所は立ち行かなくなります。矢野は顧問の渋沢栄一に窮状を訴え、東京会議所の後身である東京商法会議所の有力実業家有志の寄付や矢野自身の私財を提供して危機を乗り越えました。

商業学校は無用の長物

予算削減の危機を乗り越え公立での存続が実現して3年も経たず、矢野はまたもや窮地に陥ります。1881

年度の東京府会の予算審議で、前年度は全額承認された東京商法講習所の予算が一転、全額否認されたのです。府会では、東京府に商業学校は無用の長物であると、商人流の短見に再び押し切られてしまったのです。

予算ゼロ——それは講習所が消滅することを意味します。矢野二郎は、渋沢、益田と協議し、講習所維持を政府に要望することを決めました。1881年7月、渋沢は東京商法会議所名で、「商法学校の設立を政府に要望する之建議」を農商務卿河野敏謙（とくま）に提出して、講習所存続の危機を同省に訴えます。ところが、その後、松田道之東京府知事は講習所の廃止を公表し、ようやく軌道に乗りにかけた講習所はわずか5年で廃校となってしまったのです。

矢野は学内では生徒を説得して動揺を鎮め、学外では講習所再開のため関係者、省庁に東奔西走するという日々が続きます。

9月、農商務省は9684円の補助金を講習所に下付する決定を下しました。これにより講習所は再開され、矢野も一息つける……と思ったのも束の間、農商務省は1882年度の補助金を1万6000円余の申請額に対して1万円に減額したのです。またもやピンチに立たされた矢野ですが、このときも渋沢以下関係者が東京府下の富商に資金援助を要請します。

商法講習所が廃止されるという事件は、実業界にも大きな波紋を起します。ようやく商業教育の重要性に気づいた府下の実業家たちは、今回は積極的に寄付金を拠出しました。銀行界が6500円、個人商店からも多く醵金があり、総額1万3000円近くの資金が集まりました。

講習所存続に命を懸けんばかりに奮闘した矢野ですが、1883年11月、病氣と称して突如所長を辞職しました。

3校合併の波紋

1884年3月、商法講習所は東京府から農商務省へ移管され、わが国初の国立の東京商業学校が誕生しました。学校運営の最高機関として商議委員制度が設けられ、渋沢栄一（第一国立銀行総裁）、富田鉄之助（日本銀行副総裁）、益田孝（三井物産会社社長）の3人が就任。商議委員は校長の推薦権、教職員人事の拒否権、重要案件の農商務省への具申など、強大な権力を与えられており、学内行政への主務官庁の介入をチェックする役割を果たす一方で、実業界の有力者によって校務が左右される可能性も絶えずはらんでいました。5月、商議委員会は矢野二郎を校長に推薦、矢野は復職しました。

この頃、農商務省に対抗して文部省でも商業学校を設置する動きが活発になり、文部省独自の商業学校行政を展開します。文部卿に就任した大木喬任^{たかとう}は1884年1月、商業学校設置基準を定めた「商業学校通則」を制定し、神戸、大阪、横浜、新潟、名古屋など全国各地に続々と商業学校を誕生させました。

大木文部卿は続いて、農商務省所管の東京商業学校に対抗して、東京外国語学校の附属校として高等商業学校を設立します。その主旨は、一橋前身の東京商業学校より高い水準の高等商業学校を設置し、優秀な外国貿易業者及び領事を養成するというものでした。

この大木の教育制度整備で、東京における商業学校は一時、曖昧な位置づけがなされてしまっています。これを整備し直したのがロンドンから帰国した森有礼です。森は文部省と農商務省が対抗して、同程度の教育水準の商業

Captains 矢野二郎

学校を経営していることは納得できないとして、大木文部卿に二つの商業学校の合併を提案します。

1884年3月、商法講習所は東京府から農商務省へ移管され、東京商業学校と改称。さらに1885年5月、森の要請が通り、東京商業学校は農商務省から文部省に移管され、同年9月、東京外国語学校と附属高等商業学校、東京商業学校3校が合併されました。校舎は外国語学校があつた神田一ツ橋通町に定められ、商法講習所時代10年続いた木挽町時代が終わり、一ツ橋時代がスタートしました。

この合併で森の悲願であつた文部省管轄の国立商業学校が実現しましたが、東京商業学校以上に混乱したのが外国語学校でした。当時の外国語学校の学生は、士族出身者が過半数を占め、不平等条約の下で日本の貿易が外国人商人に独占されている現状に飽きたらず、卒業後は公使や領事となつて海外に雄飛しようという野心家であふれていました。彼らは絶えず議論していたので書生派と呼ばれていました。

この書生派には、のちに小説家となり日本の近代小説の祖となつた二葉亭四迷（長谷川辰之助）、東芝の前身、芝浦製作所を再建し、水力電気会社を箱根、九州に創業した大田黒重



商法講習所・東京商業学校校舎（木挽町時代）
『Hitotsubashi in pictures : 1950』
（1951年 田中一幸／編 一橋創立七十五周年記念アルバム委員会／刊）からの転載

五郎、廣田弘毅内閣の文部大臣平生飢三郎^{ひらお はちさぶろう}など、優秀な学生がたくさんいましたが、この合併劇で一斉に退学を唱えました。矢野は彼らの才能を惜しんで説得に努めます。多くは矢野の説得に応じて再入学しましたが、二葉亭四迷はやはり校風に馴染めないと数カ月で退学してしまつたようです。

教育理念は「実務・実践」

1887年10月、校名を高等商業学校と改称します。これは1902年、神戸高等商業学校が開設され、一ツ橋の高等商業学校が東京の二文字を冠するまで続きました。合併後も矢野は校長の職に留まりますが、この年から退官する1893年までの6年間は、以前にもまして苦難が続きます。

その一つは、前述した外国語学校時代の流れを汲む書生派と商業学校出身者に多い前垂派の対立です。書生派は木綿の緋に小倉の袴を丈短に着した純書生風の姿で、商家の若旦那風に身なりを整えた前垂派の学生とは反りが合わなかつたようです。この硬軟両派の対立はこの後一橋に何事か起こる度に画然と現れ、前者は改革の急先鋒となり、後者は穏順の保守派となります。

『矢野二郎傳』には、「明治二十二、三年の交より高度の教育を要求する運動、学生の間に萌せしが、明治二十五、六年に至り、学科を増加し程度を高めんとする要求公然校内に起れり」と記されています。矢野の

方針は、あくまで実務に練達した、人に使われる人間を養成することであり、教育内容も実用こそ不可欠なるものとし、英語、簿記、商品、商業地理、貿易実践などに主眼が置かれていました。

これは矢野の高等商業教育における限界であったとしばしば批判的にとらえられることがありますが、実際は、日本において商業教育というものが、まだ、誕生したばかりで、産業振興のための手となり足となる人材もまだまだ不足していた時代、その段階で高度な商業教育を広く求めていくには無理があったと考えるほうが腑に落ちます。

事実、矢野二郎は高度な商業教育の必要は認めていましたが、財政上、教授スタッフの充実もままならず、かつ改革は急進的であつてはならず、漸進主義をとるほかはないと考えていました。

6年間で5度の学制改革

矢野が校長を務めていた6年の間、東京商業学校、高等商業学校の学制は目まぐるしく変わりました。1886年に編集された

『東京商業学校一覧』は、一橋最初の学校要覧です。この総則に、「内外商業に関する必須の教育を施し、将来公私の商務を処理経営すべき者或は商業学校の主幹又は教員たるべき者を養成」することを目的とするとしています。まさに実業教育としての性格が顕著です。課程は尋常科（3年）、高等科（2年）に分かれ、前者は普通の、後者は高等の商業学科を授けるとしました。

しかし、この学制が翌1887年早くも改正されます。9月の新学期からは尋常科、高等科を廃して、予

科、本科を置き、修業年限をそれぞれ1年、4年としました。そして、10月には高等商業学校に校名が改められます。1888年4月には卒業後の研究生の年限が2年に改定されます。さらに、1889年3月には本科を3年に改めています。

同年10月、従来高商に進む予備課程として備えられていた附属商工徒弟講習所別科を高商の補充科とし、

高商は補充科（2年）、予科（1年）、本科（3年）の3科で構成されることになりました。ところが、1891年7月には5度目の改正がなされます。補充科と予科の境界線が曖昧で評判も悪く、ついに補充科が廃止され、予科を2年とします。

草創期であるとはいえ、このような学制の変遷はほかの学府にはみられないことです。これには時代背景として、企業が勃興し、経済界は早期の人材充足を強く求めてきたという事情があり、矢野自身がこれに応ずるためにとったものだったのです。



東京商業学校・高等商業学校・東京高等商業学校校舎（一ツ橋時代）
『Hitotsubashi in pictures : 1950』
(1951年 田中一幸／編 一橋創立七十五周年記念アルバム委員会／刊)からの転載

念願かなった校舎新築

この時期、矢野が学校経営上最も頭を悩ませていたのは校舎の新築でした。高商の教室や図書館などの施設は旧幕府開成所当時の建物でした。既に数十年を経

過し老朽化が著しく、高商が隆盛に向かうにつれ、狭隘、不便が痛感されるようになっていました。当時、学校財政は窮迫しており、実現の可能性は低いとみられていましたが、矢野の尽力により、1890年の閣議で校舎改築が決定され、6カ年の継続事業が着工されることとなりました。工事は図書館から着手され、教場に及び1894年6月、講堂の落成をもって完了しました。すでに前年、矢野は退官していますが、校長として最後の努力の結果が「我国高等商業学校として恥ることなき宏壮の」（『学友会雑誌』）煉瓦造りの校舎でした。退官の慰労会での席上、校舎落成は矢野の多年の目的だったと振り返り、出席者の文部省会計局長に丁重な謝辞を述べています。

矢野校長排斥運動

1890年10月、矢野を講習所時代から支え続けてきた教頭、成瀬隆蔵は外遊から帰るやいなや、数名の学生たちの訪問を受けました。学生たちは成瀬に対し、校制を改革してより高等な商業教育機関へ昇格させることについて、欧米での所見と成瀬自身の考えをたどしました。成瀬には予想外の訪問かつ質問でしたが、その見聞に基づき、「日本の商業の現状からすれば、徒に実体を超えて程度ばかり高めることは無益だ」と答え、学生たちを失望させます。

このエピソードの背景には、矢野の教育方針への学生たちの不満があります。それは成瀬が不在中に相当に鬱積していました。

そして翌1891年12月、ついに事件が勃発します。第1学期試験に際して、地理と簿記の2科目は元来補習科の性質を帯びているという理由で、本科2年の学生たちはその試験を取りやめられたいと学校に陳情しまし

【矢野二郎略年譜】

- 1845年(弘化2年) 幕府御家人、富永惣五郎の次男に生まれる。
- 1860年(万延元年) 外国奉行に勤め、麻布善福寺のアメリカ公使館に赴任。
- 1863年(文久3年) 1865年(慶応元年) 外国奉行池田筑後守長発の渡欧使節団に随行しフランスを訪問。
- 1868年(明治元年) 1872年(明治5年) 自費で翻訳所を開設、運営。
- 1872年(明治5年) 1875年(明治8年) 外務省二等書記官としてワシントンで勤務。
- 1875年(明治8年) 商法講習所が開設される。
- 1876年(明治9年) 商法講習所所長に就任。
- 1883年(明治16年) 所長を辞職。
- 1884年(明治17年) 商法講習所は東京府から農商務省へ移管され、東京商業学校に改称。矢野は校長として復職。
- 1885年(明治18年) 東京商業学校は農商務省から文部省に移管され、東京外国語学校と附属高等商業学校、東京商業学校3校が合併される。
- 1887年(明治20年) 校名を高等商業学校と改称。
- 1890年(明治23年) 改革急進派の学生が教頭に対し、校制改革による高等教育機関への昇格希望を表明する。
- 1891年(明治24年) 第1学期試験のボイコット事件に端を発し、学生が文部省と矢野本人に対し、矢野校長の退陣を求める事態に発展。
- 1893年(明治26年) 退職。
- 1906年(明治39年) 死去。

【出所】

『矢野二郎傳』

(島田三郎編／著 矢野二郎翁傳記編纂會／刊 1913年発行)

『一橋大学百二十年史 — Captain of Industry をこえて —』

(一橋大学学園史刊行委員会／編 一橋大学／刊 1995年発行)

『日本の近代化と一橋』

(小島慶三／著 如水会／刊 1987年発行)

※文中敬称略

※引用文中の旧仮名づかい、旧漢字は、現代表記へ改めました。

た。しかし、矢野はこれを容れなかったため、本科2年はこれらの試験をボイコットすることを申し合わせ、数名の脱落者を除くほかは、試験場に姿を見せませんでした。この挙動は単なる発火点に過ぎず、学生たちの目指すところは、矢野校長に対する批判、難詰でした。本科3年、1年、予科生もこれに同調、学生たちはこもこも文部省を訪問して、矢野の失徳を訴えました。

12月15日朝、学生有志40名余りが矢野の私邸におもむき、面会を許された委員数名が、校長のこれまでの功労を謝したうえで、「時代の進歩はすでにその職に在るに過ぎざるを述べ、全校生徒のこれを希望する今にして処決する所無くんば従来の徳望をも傷付くる恐れあり」(『一橋五十年史』より)と、条理を尽くし誠心誠意、矢野校長に辞職を勧告しました。矢野は即答を避け、ただ

Captains 矢野二郎

学生たちの熱意を謝するのみだったと伝えられています。年が明けて1月8日の開校式当日、矢野は式には出席せず、会場は大混乱に陥りました。学生たちは校長室に押しかけ矢野に迫りましたが、矢野はここでも答えることはありませんでした。同10日、学校当局は首謀者46人に退校命令書を発しましたが、このニュースに学生たちは痛快を叫び、退校者は大興会を組織し、「自らの犠牲のもとに母校を新たな船出に押しやったのである」(『如水会の歩み』より)と闊いの勝利を宣言しました。

悲運の退官

1893年4月、商法講習所から18年、「揺籃の雅子をして長大の健児」たらしめた矢野の時代は終わりを

した。これは一橋が成長するための高価な犠牲でしたが、また一方でさまざまな遺産となりました。一つは、この排斥運動のちに幾度となくくり返される学生運動のモデルとなり、この書生派的行動は文部省の介入強化を招くことになります。

矢野は学生との談笑の間、しばしば自己の経験を告げ、常識を基礎とする実地的書生の要義を説いています。『矢野二郎傳』には、「実戦市場に雄飛せんと欲せば、学校の教科を修むると共に矢野の教育を受けざるべからず」と記されています。ときに傲慢ともとれる言葉ですが、人は歴史の要請のなかで生かされているとすれば、この時代、この国において、矢野が目指した商業教育は、今日の日本の姿から顧みても決して間違いはなかったといえるのではないのでしょうか。

一橋の女性たち

第28回



一橋大学には、ユニークでエネルギッシュな女性が豊富と評判です。彼女たちがいかにキャリアを構築し、どのような人生ビジョンを抱いているのか？第28回は、国内外の金融業界を生き抜いた経験をいかし、現在は金融専門の人材サービス業で活躍する霍野菜穂子さんです。聞き手は、商学研究科准教授の山下裕子です。

NEW MILLENNIUM GROUP

霍野菜穂子氏



Nahoko Tsuruno

商学研究科准教授

山下裕子



Yuko Yamashita

泡から生まれた真実

バブル経済のご真ん中で
大金を動かす

山下 霍野さんは男女雇用機会均等法施行の第1世代ですね。ずっと金融の世界、それも外資や海外で活躍してこられました。もともと、どのようなキャリア像を描いていたのですか。

霍野 最初は、日本の信託銀行に入社したのです。「第1世代」とはいつても、1つ上の先輩がエンターは男女別々、女性は制服を着て働くという現実を見ています。総合職として営業店で働くよりは、投資に関わる仕事の方が面白そうとファンド・マネージャーを希望しました。2年で、外資系の金融機関に転職しました。その後も再度ヨーロッパ系の金融機関へ転職しました。私のスペシャリティは金融派生商品の営業です。時代という追い風の中、立ち止



霍野菜穂子（つるの・なほこ）

1986年一橋大学法学部卒業。川井健ゼミ。

同年より、安田信託銀行にて2年間勤務の後外資系金融機関へと転職。

その後数回の転職を経て、1998年にイギリス・ロンドンへ渡る。

2011年に帰国、NEW MILLENNIUM GROUPにて人材サービスに携わる。

まる暇もなく目指すゴールにも疑問を感じることもなく、ただ走り続けていたという感じです。そして気がつけばイギリスに移り住んでいた(笑)。

山下 キャリアのスタートが、バブル経済の真っ最中、映画の『ウォール・ストリート』の世界でした。

霍野 米国債は日本が買い占め、今の中国みたいなパワーがあった時代でした。1000万ドル以下のロットでは売り買いしない、など考えたこともない金額が電話一本で取引されるわけです。今思うと甘いけれど、自分のパワーが急激に増大したような感覚でしたし、テレビゲームの世界に身を置いているようでもあった。現実味は感じられないけれど、ゲームを始めたからには上手になりたいという気持ちでした。

山下 向上心が、ヨーロッパの厳しい金融業界で生き抜くタフさを養った要素ですか？

霍野 それもあるでしょうが、1998年にロンドンに行き、世界は日本だけじゃないんだと身をもって知らされたことが転機になったと思います。「違うこと」が尊重されるイギリスの文化に触れ、初めて自分の人生を見直そうと思いました。自分の仕事はどれぐらい世の中の役に立っているのかに疑

間を持つようになったのです。今から思えばその後転職を繰り返したのも、答え探しの一つだったのかもしれません。

金融業でのスキルセットが、 フィランソフイーを改革した

山下 シティ^{*1}の人々は、チャリティにとっても熱心だそうですね。

霍野 いろいろな人が様々なチャリティ活動をしているものだから、しょっちゅう募金のお願いが回ってくるんです。

山下 芸術の財団の経営に関わられるようになったのですが、きっかけは、何だったのですか。

霍野 募金のどれぐらいが目的のために使われるのか、具体的に考えれば考えるほど現実味がないように思っていました。

山下 B B C等を見ていると、社会貢献活動について相当突っ込んだ議論をしていますね。小さな虚栄心のために支援先の発展を逆に妨げているのではないかと、活動運営の非効率性のために活動のための活動になっているのではないかと、等々。

霍野 そんな時に趣味として楽しんでいたモダンアート鑑賞で出入りしていたC A S^{*2}から、ファンドレイジングの相談が私のもとにきました。「寄付が今までのように集まらない」ということでした。これをフィランソフイーというよりは新しい資金源を探すプロジェクトとして手伝い始めました。これが自分でもびっくりするぐらい面白かったのです。その時に初めて自分の経験とスキルセットに感謝しました。金融の知識とかいう狭いものではなく、クロスボーダーでコミュニケーションができることや、高

い仕事のモラル、そして結果主義なことまでも。

山下 ロンドンでのお仕事も順調そうで、新たな生きがいも発見し順風満帆という印象ですが、この度13年ぶりに日本で仕事されることになったのはなぜですか？

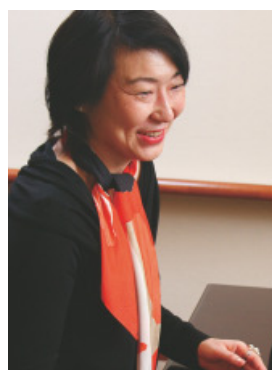


霍野 ロンドンでの生活は、大変心地よく正直日本に戻るつもりはありませんでした。ところが、ちょうどC A Sのプロジェクトを手伝い始めた直後に母が手術をすることになって、一時帰国しました。大事には至らなかったものの、母が随分小さくなってしまったように思えて、ショックでした。

それまでは、自分のやりたいことを第一に考えていましたが、この時初めて真剣に帰国を考えるようになっていました。

山下 帰国後の仕事について教えてください。

霍野 東京での仕事を探し始めた頃、今の会社であるNEW MILLENNIUM GROUPからオファーをいただき、勤務することになりました。業務は金融エグゼクティブのヘッドハンティングです。



バブルから20年。
日本は、話題にものぼらない国になってしまった

山下 海外の同僚に帰国を残念がられたのではないですか。

*1 シティ・オブ・ロンドン (ザ・シティ) = ロンドンの金融街。

*2 CAS/Contemporary Art Society

霍野 個人的にはそうですが、ショックだったのは「東京へ帰ってもつまらないと思うよ」と全員に言われたことです。世界を相手に働いていると、その時々日本の立ち位置が見えてきます。プレゼンスが落ちていくというより、話題にものばらないんです。一人の同僚が「ナホコが帰るんだっから行ってみようかな」と言ってくれましたが、日本が海外から「訪れる価値のある」と思われる国になってほしいと心から思っています。

山下 私たちの研究の世界でも、まさに今、その問題と戦っているんですよ。

霍野 シティの人たちは誰一人として「ヒトツバシ」を知らないんです。これも悔しかったですね。

山下 “一橋を世界にアピール”する、といっても、人がいない、お金はない、現状では効果的なアピールは難しいという焦燥感があります。

霍野 企業のCSRにしてもアニアルレポートの扉でお経のように唱えるだけの会社が多いですけれ



対談を終えて

Vintage Champagne

霍野さんは謎の女だ。

1年後輩の彼女との出会いは、新入生のオリエンテーションだった。当時からとても不思議な魅力の持ち主で、個性が際立っていた。とびきり仕立てのよいワンピースを身にまとった優等生のお嬢さんなのに、規制の枠におさまらず、どこかはみ出す。そのアンバランスさが何ともいえないユーモラスな味わいを醸し出し、彼女自身、それを面白おかしく戯画化するものだから、いつも大笑いであった。映画やアート鑑賞に明け暮れていた私の、訳のわからない前衛趣味に「面白そうですね!」と付き合ってくれたのが彼女だった。シネヴィヴァンの柿落しだったゴダールの『パッション』や、『コヤニスカッティ』なども一緒に見に行った。都会の刺激に現をぬかしていた私とは違い、授業にも皆出席だった。「菜穂子ちゃんは、どうやって時間を作っているの?」謎の始まりである。

最初の転職先だったドレクセルの破たんあたりから、謎の女ぶりが露わになる。「出社したら誰もいなかったんですよ〜」と、いつものように笑い話を聞かせてくれたが、若い身空で、どうやって残務処理ができたの? と思っていたのもつかの間、最先端の金融の世界を優雅に泳ぎ始めたではないか。

若い彼女の成功を嫉んだ秘書の女性に詰め寄られた時の話を今でも覚えている。「数式を一つ見せたんです。切った張ったの世界の背後にも論理がある、って」ブラック=ショールズモデルだったそうだ。

ロンドンで新しく花開いた、アート財団のマネジメントの活動の話を聞き、謎の女の真実が垣間見えた気がした。

グローバル金融時代の大波の中を突っ走った人生、さぞかし大変だっただろうに、苦勞を見せない。愚痴や悪口を聞いたことがない。いくつゼロが違う世界に住んでいるのか見当もつかないが、慎ましい世界に生きている私のような旧友に負い目を感じさせない。

ふと頭に浮かんだ言葉が、「君子の交わりは淡き水の如し」。礼記の対句に「小人交甘如醴(甘酒)」とあるように、愚痴や悪口は、瞬間は甘い蜜の味かもしれないが、関係を腐らせ人格をジワリジワリと蝕む。さらさらと気持ちのよい関係を支えるのは、知性や人間性だろう。

バブルは消えるが、人間は残る。

年代物のシャンパーニュのように、深みを湛えた彼女と久しぶりに再会して、自分では決して味わうことのできなかった人生との出会いを作ってくれた我が母校に心から感謝した次第である。年代物のシャンパーニュは、泡がまろやかに抜け、芳醇で濃厚、そして甘いそうだ。謎の女は、水のようにさらりと醴酒を飲み、決してそれに溺れたりしない。

(山下裕子)

でも、大学ともなるとさらに、課題は多そうですね。資金や人材が少ないという問題でとどめずに民間企業と面白いプロジェクトが考えられるのではありませんか。これだけ世界中でOBが活躍しているのですから、学生をトレイニーで働かせてもらうとか、空白の20年を取り戻すには小さい一歩から始めていくしかないのではないのでしょうか。

山下 最後に海外で活躍し続ける秘訣などありましたら教えてください。

霍野 日本人には多いタイプですが、私も10代の頃から与えられたものを完璧にこなすことをトレーニングしてきたわけです。でも、それだけじゃ、ロンドンではランチ一つ満足には食べられません。お昼にサンドイッチを食べようと店へ行くと、どんな種類のパンにする、チーズの種類は、中身のチョイスは、ドレッシングの種類は、と下町訛りでまくし

立てられる(笑)。

私は英語があまり得意じゃなかったし、留学経験もなかったから、最初はまったく聞き取れなくて、それこそ何十回も聞き返しました(笑)。そうすると次に行った時、その人が覚えていて「ハロー」と声をかけてくれるんです。実は、仕事の面でも、朝は誰にでも挨拶することがとても大切。些細なことからコミュニケーションの糸口がつかめてくるのだと思います。



One and Only One

第29話

大住良之氏

サッカージャーナリスト



Yoshiyuki Osumi

1966年ワールドカップ 決勝戦に魅せられた

大住良之さんが世界レベルのサッカーに初めて触れたのは、中学3年生の夏休みのことだった。

「1966年の第8回FIFAワールドカップ・イングランド大会。たまたまテレビをつけたら、開催国イングランドと西ドイツの決勝戦を放送していたのです。すごい試合で、すっかり魅せられてしまいました」

イングランド大会決勝戦は、サッカーファンのあいだで今でも話題になる一戦だった。まず、イングランドがワールドカップ初優勝を果たした。もう一つは、ジャッジの判定が物議をかもしたことである。

試合は2対2の同点で延長戦に突入した。前半10分過ぎ、イングランドが放ったシュートはクロスバーに当たり真下へ落下。ボールがゴールラインを完全に割ったかどうか、微妙な位置であった。9万7000人の観客が固唾を呑む中「ゴール」の判定。西ドイツは猛烈に抗議したが、もちろん判定は覆らなかった。「たまたま」ではあったが、大住さんは、後世に残る試合を観たことになる。夏休みが明けると、大住さんはサッカー部に入学した。

「私が通っていた栄光学園は、1947年にイエズス会が設立した学校です。ヨロロツパから神父さんが大勢来ていたことから、サッカーが「校技」のようになっていました。栄光でもっとも盛んなスポーツでしたね」

サッカージャーナリスト

大住良之氏の

サッカーが
楽しく面白くて
たまらない人生

当時の栄光学園は、神奈川県最強豪校の一つだった。大きな理由は、二つあった。まず、神奈川県ではサッカーに力を入れている学校があまり多くなかったこと。さらに、栄光学園は中高一貫教育のメリットで、部員の多くが中学1年生からサッカーをやっていたことが挙げられる。

「周りの学校は、高校からサッカーを始めた選手がほとんど。この時期の3年間の差は、かなりのアドバンテージになったでしょう。実際、私の5級上は神奈川県代表として高校選手権に出場しています」

大住さんの学年は、神奈川県で3位。大住さんのポジションは、フォワードだった。

「入部したのが中学3年の途中でしたから、他の部員とは経験に2年以上の開きがありました。身体も小さく足も遅い。何の取得もなく、ひたすら頑張るだけでした。人より技量がすぐれていたからサッカーが楽しかったというわけではなかった。それでも気がついたら、サッカーが好きでたまらなく、そして面白くてたまらなくなっていました」

楽しく、面白い

その

2

弁護士志望を断念し サッカースクールのコーチに

好きでたまらなく、面白くてたまらなかったサッカー。だが高校卒業後、大住さんはプレイヤーとしての道を歩まなかった。1970年、一橋大学法学部に入學。

「法学部を選んだのは、弁護士になろうと考えたからです。しかし、自分にあったよさそうな仕事というだけで、強い動機があったわけではありません」

One and Only One



大住さんが入学した年は、70年安保闘争の真っ最中だった。

「入学後1週間で、大学はスト突入。ほとんど何も出来ないまま夏休みになってしまいました。私は弁護士志望者のサークルに入っていたので、仲間と一緒に自習会をやりました。高校時代、サッカーを十分に楽しんだので、これからはしっかり勉強して弁護士になる。そう考え、一生懸命勉強に取り組みました」

しかし、大住さんの「一生懸命」は、1年間で幕引きとなってしまった。

「法律を勉強するうちに、本当に自分が弁護士に向いているのかと疑問を感じるようになりました。刑事裁判では倫理的判断の比重が高く、これについては自分にはしっかりした考えがあるという自信が持てた。しかし、民事裁判は違いました。原告、被告どちらにも、生活を背負ったの言い分があります。世の中のことをまったくといってよいほど知らない自分に、どちらが正しいか判断できるのだろうか。そこに大きな疑問と不安を感じました。その結果、弁護士という仕事に対し、これをする、これしかないという方向性が見出せなくなってしまったのです」

弁護士を仕事にすることは断念したものの、その頃の日本は高度経済成長時代であったため、「売り手市場」で就職先を心配する必要はなかった。まして一橋大学である。「3年になると、企業から入社案内のパンフレットが天井に届くほど送られてきました」という。両親も「普通の就職」を望んでいた。だが大住さんは、そんな安定路線から外れることになった。理由は、やはりサッカーであった。

「大学2年のとき、アルバイトではありませんが、

One and Only One

東京で組織されているサッカースクールのコーチ募集があり、それに応募し採用されました。スクールが対象にしたのは、主に小学生でした」

手がけてみると、大住さんにとって、これが単なるコーチの枠を超えて「楽しくて、面白くてたまらない仕事」になっていったのである。

楽しく、面白い

その

3

一生懸命子供たちと接し「やりがい」を実感する

大住さんがコーチに採用された70年代初頭、日本のサッカーはどのような状況だったのでしょうか。

「東京オリンピック（1964年）からメキシコオリンピック（1968年）の頃、サッカーがブームとなり、サッカースクールが全国に続々と誕生しました」

東京オリンピックでは、イタリア棄権という幸運はあったが、グループリーグでアルゼンチンを破りベスト8入り。メキシコオリンピックでは、3位決定戦で地元メキシコを2対0で退け銅メダルを獲得し、釜本邦茂が得点王に輝いた。

「しかし、ブームは長続きしませんでした。ピークはメキシコオリンピック。以後、サッカーは話題性に乏しくなり、やりたいという子供が徐々に減ってきた。私がコーチになったのは、そんな時期でした」

サッカースクールの本部は、進学教室を経営する会社だった。生徒獲得の一環として東京全域にサッカースクールを展開しており、最盛期には2000人を擁していたという。

「私が担当したのは、城北地区のスクール。王子にある私立高校の校庭を借りて週1回、日曜日が練習日でした。名簿上では50人ほどいたのですが、親御さんと話をすると本当にやる気のある子供だけに絞った結果、残ったのは20人程度。その後、50人近くに回復しましたが、私のいるあいだ、1人も辞めることはなかったですね」

ちなみにとんねるずの木梨憲武さんも、大住さんのスクールのメンバーだった。その後、木梨さんが帝京高校のサッカー部に所属したことは、広く知られている。

「コーチになったとたん、アルバイトという意識は消えてなくなりました。自分が選手るときは、うまくできれば楽しいし、ダメなら落ち込む。極端にいえば、その場その場の成功と失敗にとらわれ過ぎていたわけです。しかし、子供たちに教える場合、勝ち負けや成功失敗のみにこだわるわけにはいきません。私は教えるにあたり、将来にわたって子供たちがサッカーを友としてくれるにはどうしたらよいのか、そのことを中心に置いて指導のやり方を考えることにしました。コーチは未経験ですから、いろいろ勉強しなければならぬ。子供たちと接するのも一生懸命。けれどこうしたことのすべてが、とても楽しかったのです」

子供たちにサッカーを生涯の友としてもらう。それには、まずサッカーを好きになってもらうなければならぬ。好きになる大きな要素は、技術面でのレベルアップ。

「いっしょに指導してくれたコーチに恵まれました。彼らの尽力で、子供たちがレベルアップしていき、その結果サッカーを楽しんでくれ、辞めずに続けてくれたのだと思います。やりがいのある

仕事にめぐり合ったというのが実感でした」

どうやら大住さんのサッカー人生の原点は、このスクール体験にあるようだ。

楽しく、面白い

その

4

『サッカーマガジン』に就職し ワールドカップを初めて観戦

大住さんは、大学を卒業するまでサッカースクールのコーチを務め続けた。



「指導は週1回、日曜だけでしたが、毎日本部に通っていました。次の日曜の準備、月1回発行の会員向け会報誌の編集作業、春・夏・冬に行うサッカースクール合宿のプランニングと実施など、やることはたくさんありました。こうした仕事を通じて周囲から認められるようになったため、楽しさと面白さがいっそう増していきました」

さらにこうした体験が、働くことへの自信につながったという。

コーチになって2年目、3年生になっていた大住さんは、就職活動の時期を迎えた。志望は、ベイスボール・マガジン社が発行していた『サッカーマガジン』の編集。理由は「そこならワールドカップに行ける機会がもっともありそうだったか

ら」というものだ。

大住さんは履歴書を編集長に直接渡そうと考え、ベイスボール・マガジン社の近くから電話をした。

「『サッカーマガジン』の裏表紙に、編集兼発行人・池田恒雄とありました。私は池田さんが編集長だと思ったのですが、実は編集長どころではなく創業社長だったのです。しかし、学生にそんなことはわかりません。取次の女性に『サッカーマガジン』の池田さんをお願いします」と伝え、用件を話したところ、親切な方で編集長につないでくれました。その日は喫茶店で話をしただけでしたが、1カ月ほどして編集部から『社長が会いた



いと言っている」と連絡がきました。社長とは雑談程度の話だけでしたが、それで入社が決まったわけです。その後、人手が足りないのでアルバイトで来てほしいと言われ、4年の4月から『サッカーマガジン』の仕事に携わるようになりました。サッカースクールのこともあるのですが、本当は気が進まなかったのですが」

サッカースクールと『サッカーマガジン』のアルバイト。授業は、どうしたのだろう。

「大学へ行ったのは、ゼミの日だけ。思い返すとひどい学生でした」

大住さんが一橋を卒業したのは、1974年である。

「その年のワールドカップは西ドイツ大会。まさか入社早々の新人を行かせてくれるはずはありません。4年後のアルゼンチン大会だったら、可能性はある。行けたら会社を辞めてもよいぐらいに考えていました」

ところが、大住さんは西ドイツ大会を現地で観戦できたのである。

「大会が始まる直前の5月初めのことでした。編集のチーフから、『大会の前半だけなら行ってもいいよ。ただし自費だけ』と言われたのです」

西ドイツ大会での体験は、大住さんにとって「聞く」と見るとは大違いの典型だった。

「ワールドカップについては、さまざまな話を聞き、書かれたものもたくさん読んでいました。また、テレビではありますが試合も観ていた。

だから、ワールドカップがどれほどのものか頭では理解していたのですが、現地に行くとなんとものはすっかり飛んでしまいました。毎日が新たな発見で、楽しかったですね」

「新たな発見」が、世界トップクラスのサッカーを観ることから生まれたのはもちろんだ。しかし発見は、決してそれだけにとどまるものではな



かった。それは「観客」の存在だった。

「キックオフは夕方なのに、大勢の観客が朝から町のあちこちで、飲んだり食ったり歌ったりしてワーワー騒いでいる。開始時間が近づくと、スタジアムにこぞって移動。やはりスタンドでも歌っている。話には聞いていたものの、実際に見た光景は想像とまったく違っていました。こんなにたくさんの人たちが、情熱を傾けてサッカーに熱狂している。大変なエネルギーを肌で感じました。驚きと感動ですね」

帰国しても大住さんは、『サッカーマガジン』の仕事辞めなかった。

楽しく、面白い

その

5

「書くことでやっていく」 きつかけは編集長コラム

大住さんは、日本のサッカージャーナリストの先駆者の存在である。言葉を換えるなら、「日本のサッカー専門ライターの嚆矢」ということになる。

『「サッカーマガジン」は少ない人数で作っていたから、取材も記事もほとんどが自前。海外へ取材に出かければ、長い記事は何本も書かなければいけない。書くだけでなく写真も撮ります。場合によっては、レイアウトも引く。書くことがより楽しくなったのは、編集長になってからです。編集長のコラムがあり、それを書くのがとても楽しかった。『書くことでやっていきたい』と思うようになったきつかけは、このコラムでした」

大住さんがベースボール・マガジン社を辞めたのは、1982年のことだった。

「サッカーを専門に書くこう考えたわけではありません。4年間編集長をやり、かなり消耗してしまった。衝動に近かったかもしれません。次にやることを何も考えずに辞めました」

退社から5年間、大住さんは「アンサー」という会社でサッカー関係の仕事に携わった。

「広告代理店と組んで、トヨタカップ、キリンカップという国際的なサッカー大会の広報活動にかかわりました。世界のクラブチームをいくつも取材したので、もっとも勉強になったのは、クラブの経営と運営。たとえば、ヨーロッパ

のある町にライバルチームが存在し、一方は成功しているのにもう一方はうまくいっていないというケースがあります。調べてみると、成功した要因と失敗した要因が明確に理解できました。これは、Jリーグがスタートしてから、リーグやクラブの経営・運営について書く際のベースになりました」



大住さんがフリーになったのは、1988年。サッカージャーナリストの活動に専念するようになったのは、1990年のことである。

「フリーになったとき、5年後の1993年にプロリーグができるという話がありました。しかし、サッカー関係者でも本当にできるのかと半信半疑の状態でしたから、私もサッカーで食べられるとは思っていませんでした。プロリーグ設立の機運が盛り上がり始めたのは、90年、91年あたりからでした」

そして、1993年5月15日、Jリーグがスタートした。以後、日本のサッカーは、2002年のワールドカップ日韓共同開催、ワールドカップ連

One and Only One

続出場、グループリーグ突破など、確実にレベルを向上させてきた。しかし……。

「私は、ただ日本代表が強くなればよいということではないと思っています。私が自分の立ち位置としているのは、サッカーをやる人も観る人も、それによって幸福になったり、人生に豊かさを感じたりできるということ。どうすれば、サッカーがそれにつながる存在になれるか。日本のサッカーチームの頂点としての日本代表が強くなることで、その役割を果たす。そうやってほしいと考えて仕事をしています」

大住さんが、好きなサッカーを仕事として「楽しく、面白く」やっていくには、この志が不可欠なのである。

楽しく、面白い

結論

「超エリートでないからこそ できる自由な発想」

「一橋の後輩に会って、私の頃と共通の雰囲気を感じます。一橋出身者は、社会的にはエリートとあってよいでしょう。しかし、超エリートではないように思います。そのため、超エリートが陥りがちな『こうあらねばならない』とか『勝ち続けなければならぬ』という堅苦しさはなく、柔軟かつ自由な発想ができていないのではないかと。一橋の存在理由もそこにあると私は思います。私が仕事をしているサッカーの世界には、ビジネス社会における超エリートの人はいません。一橋出身者ですらほとんどいない。その分、より自由でいれます」

◆大住良之（おおすみ・よしゆき）

サッカージャーナリスト。

1951年神奈川県横須賀市生まれ。

1974年一橋大学法学部卒業。

1974年ベースボール・マガジン社入社。『サッカーマガジン』編集部所属。

1978年『サッカーマガジン』編集長に就任。

1982年ベースボール・マガジン社退社。

1983年～1988年アンサー社に所属しサッカーの振興活動に携わる。

1988年フリーに転身。

1990年サッカージャーナリストの活動に専念。

1998年アジアサッカー連盟「フットボール・ライター・オブ・ザ・イヤー」受賞。

『浦和レッズの幸福』（アスペクト 1998年）

『ワールドカップの世界地図』（PHP研究所 2002年）

『代表戦記 二つのナショナル・チームが闘った600日』

（日本経済新聞社 2004年）など著書多数。



自然療法

What you eat is what you are.

私が「自然療法」という言葉を初めて知ったのは、たまたま手に取った『食生活が人生を変える―細胞が活気づく“自然療法”の知恵』（東城百合子／著 三笠書房／刊）という本であった。その当時、私はアメリカに留学しており、一時帰国をした時にこの本を手にした。アメリカでは一軒家に大学院生の女子6人と住んでいたのだが、台所を頻繁に利用するのは、留学生であるインド人、スペイン人と私の3人だけであった。この3人で、ガスパチョ、野菜カレーなど各国の料理を楽しんでいたのだが、最も衝撃を受けたのは、他の同居人であるアメリカ人学生が、朝はシリアル、夜はレンジで温めたご飯のみで、全く包丁を使っていなかったことだった。そのような多国籍な(?)食生活を見るにあたり、食事からの健康ということに非常に興味が湧いていった。

「自然療法」は、本来カラダに備わっている自然治癒力に着目し、自然を師とし、生活を見直して、食事と手当て法から体質改善をすることが魅力であった。10代前半から季節性の花粉症に悩まされていたので、この本を参考に、留学している間に少しずつ体質改善をしてみようという気持ちになった。幸いにも、留学していた地域では、私がアレルギー反応を起こす花粉は飛散していなかったのだので、これをチャンスとばかりに、食事による体質改善をしてみようというきっかけにもなった。

アメリカに住んでいたにもかかわらず、私の普段の食事は、玄米、味噌汁、ひじき、青菜のお浸しなどの地味な和食が中心であった。どうもアメリカのスーパーで肉の塊を見せると、その大きさから（目にしただけで）お腹いっぱいになってしまうこともあり、食材を工夫し楽しみながらアメリカで自然療法を実践してみることにした。

カラダの感覚を大事にする手当て法

私がアメリカに住んでいた地域では、手当て法の材料がなかなか入手できないこともあり、寒い時期にはバケツにお湯をはって、足湯をする程度で、手当て法ということにあまり注目していなかった。帰国してから、日々の生活で手当て法を実践するなかで効果を実感したのが、こんにやくによる温湿布である。こんにやくが湿布!?と仰天される方もいるかもしれない

いが、こんにやくは昔から「腸の砂下ろし」として重宝されており、カラダの中からも外からも活用できる。体温の低下が免疫機能を低下させることは最近よく言われていることだが、温めたこんにやくは体温の低下を防ぐ効果があり、寝ころんで当てているだけで気持ちがいい。やり方はとても簡単で、まずはお鍋に水をはり、そこにこんにやくを2丁入れて、30分ほど沸騰させる。これをタオルに包み、丹田、肝臓、腎臓に当てていると、体温がカラダの中から上がっていくのがわかる。

少し調子が悪い、悪寒がすると思ったら、足湯をして、梅肉エキスをなめて養生すると回復が早いこともカラダが教えてくれた。もちろん、それでも調子が悪くて病院のお世話になることもあるが、その前に、日々の生活を大事にして、カラダから発せられるサインや感覚に気づき、微調整して、体調を整える楽しさがある。

ゆったりと気長に：自然との和を大切に

このように本を片手に、自分で工夫して応用し、カラダと心に影響がでてくるのを観察するのは非常に面白い。ただ、何十年続けてきた生活を変えて、アレルギーを短期間で治すというのは虫のいい話で、根気よく気長に楽しみながら、自然療法を続けていきたいと思う。おかげで、5年近く自然療法の本を通じて学んでいるうちに、完治とまではいかないが、花粉症は昔に比べて大幅に緩和された。それでも、自然療法を趣味と呼べるほど実践しているとは言い難いが、自然療法の内容自体は、日本の先人達の智慧、家庭医学が凝縮されたものであり、それを少しでも実践し、前向きに仕事や日常の生活に生かせればと思う日々である。



Love of Culture

自然療法



商学研究科専任講師

秋庭裕子

田舎にいた頃、長距離を走らされるのが本当に嫌いであった。中学のときに地元で国体が開催されたせいか、高校が例年県総体優勝を自慢（ノルマ）としていたためか、中高ともに、何かにつけてやたら走らされた。大学に入った喜びの一つとして、もう走らなくてよくなったことをまず挙げたくなるほど、走るのが嫌だったと記憶している。

ところが、この20年近くも続いた「走らなくてよい幸せな日々」に、ある日突然ヒリオドが打たれることになった。それは、任期付きの仕事が終わり次の職もなく、そこはかたない喪失感を抱えて久しぶりに帰省した2006年の秋のことである。

田舎道を走る喜び

なぜまた走り始めたか、ということがきれいに説明できればよいのだが、走り始めた理由など覚えてはいない。まあとにかく、なんだか走りたいと思ったのである。急な思いつきだったため走るための準備もなく、仕方ないので昔の運動着と古びたシューズをひっぱり出して、実家の近くにある川沿いの自転車道を、ゆっくりと走り出した。

最初にどこまでどのくらい走ったのかも、今となっては思い出せないが、あまりに久しぶりに走ったので翌日脚の色々なところが猛烈に痛かった、ということには鮮明に覚えている。ところが、なぜか次の日もその次の日も走った。日の暮れる前に家に帰れるように、毎日同じような時間に家を出て、ゆっくりと、少しずつ。

走る道も基本的には同じである。家を出たら田んぼを横切つて土手に登り、川に沿って上流へ向かう。天気が良ければ左手に大山が姿を見せ、さらに遡っていくと正面に中国山地の山々が広がる。山と田んぼの中をしばらく走って、古い町並みのある集落を越えたあたりで引き返し、同じ道を下って左手に中学校が見えると間もなく中海に至る。中海に着いたら折り返し、同じ道を家まで戻っていく（写真は全てこの道沿いのもの。後で知ったことだが、ゲゲゲの女房の里はこの道のすぐ脇にある）。



Tramps like us, Baby we were born to run



気がつくくと、昔なんとも思わなかった道が、美しく味わい深いものに感じられるようになっていた。山と川と田畑に流れる風、音、そして匂い……走りなれた道をひとり行けば、若くして亡くなった友や淡い思いを寄せたひと、あの頃抱いた夢や感じた気持ち、懐かしい風景の中に浮かんでは消えていく。そのような思念さえも捨て去っていくかのように、立ち止まらず、ただ走り続けた。田舎を離れる日がきたときは、この時間を失うことが心から口惜しく思われたものである。

走り続けられるように

意外だったのは、美しい田舎道とはほど遠い東京の道路で、時には室内のマシンの上で、なぜか現在も走っていることである。風景が楽しめないのに音楽を聴きながら（表題でお察しの方もおられるだろう）、毎日は無理なので週に数回程度、ひどい故障をして一時歩くことすら苦痛になったときもあったものの、今までなんとか走り続けている。

どうやら、走ることに、田舎道の楽しみ以外に、ひよつとするとそれ以上の、なんらかの魅力があるようである。でなければ、根性無しの自分が、痛くて苦しい思いをしてまで続けることができたはずがない。

とはいえ、それが何かと言われると正直よくわからない。考えれば色々、それこそ無数にあるような気もするけれど、そんなことはどうでもよいのである。まさに、生きることがそうであるように。

というわけで、「趣味」と言えるかはともかく、私は現在も走っている。もちろん、マシンや都会の道ではなく、できれば毎日あの田舎道を走りたいけれど、（ありがたいことに）それは最後の楽しみということになりそうである。そのときに気持ちよく走ることで、走り続けていききたいと思っている。

Love of Culture

Running



法学研究科講師

但見 亮

政治の耽美主義化に 対抗しうるか

中学生のころ、クラシック音楽というものも聴いてみようと思い立ち、わけもわからず最初に買ったレコードが何とベートーヴェンの『三重協奏曲』。繰り返し聴いたが、どうも曲そのものがいまひとつピンと来なかった。そのレコードの解説にも、この曲は従来あまり評価が高くなかったが云々とあり、少々がっかりした（ずっとあとで読んだ吉田秀和氏の本には、ベートーヴェンのまれな「愚作」の例と書かれていた）。だがしばらくして買った「田園」交響曲、フルトヴェングラー・ヴィーン・フィルの演奏、これは一聴たちまち気に入った。第1楽章の悠然たる流れはまさに広やかな自然を感じさせ（このテンポがほかの指揮者のものに比べてはるかに遅いことはのちに知った）、オーケストラのみずみずしく清浄な響きに耳が洗われる思いがした（この1952年スタジオ録音は、フルトヴェングラーの全録音のなかで最も音質がよいもののひとつである）。

生涯が目ざれ続けてきた大指揮者

個人的な話はこれくらいにするが、ドイツの大指揮者フルトヴェングラー（1886～1954年）は、その演奏に現在でも大きな関心が寄せられているだけでなく、その生涯が「問題」とされている点で、演奏家としては突出した存在である。何しろ伝記のたぐいが、ドイツ語・英語・フランス語のものだけでなく10冊ほどあるのだ。その大部分が日本語で読めるが、昨年ヘルベルト・ハフナーの『巨匠フルトヴェングラーの生涯』（原著は2003年刊）が邦訳された。この著作は、資料を博搜しそれらに語らせるという実証的な姿勢を基本としている。とくに青年期に関する部分は充実しており、またこれまで書くのが憚られてきたプライベートな事柄、つまり女性関係および非嫡出子たちとの関係がはっきり記述されているのも本書の特徴に数えられる。

だが、読者の関心はまず何といつても、巨匠とナチ政権

とのかかわりがどのように記述されているかに向かうだろう。フルトヴェングラーは、芸術と政治は無関係であるべきだという信念をもっていた。ヒトラーに嫌われていた作曲家ヒンデミットを公然と擁護し、また多くのユダヤ人音楽家に救いの手をさしのべた。ヒトラー誕生日祝賀コンサートに指揮をあらゆる口実を使って回避し、第二次世界大戦中、ドイツが占領した国では指揮するまいとした（ただし実は指揮した例があったことをハフナーは指摘している）。しかし周囲に勧められても亡命しなかった。ドイツにとどまって守るべきものを守る道を選んだ。

フルトヴェングラーの幻想

フルトヴェングラーのこうした行動の底には、彼の抱いていた数多くの「幻想」があるとハフナーは見ると。大作作曲家としての天命を授かったという幻想、芸術が優れた人間を作るといふ幻想、『完全な芸術家として』生きることを可能にする『永遠にドイツ的なもの』があるという幻想、芸術と政治とは区別されうるといふ幻想（488ページ）。

本書を読み終えて評者は、そうした「幻想」を、大きな歴史的バースペクティヴのなかで考察してみたいと思った。ファシズムは、ヴァルター・ベンヤミンの言葉を借りれば、「政治の耽美主義化」を行う（ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」）。すなわち、政治のための装飾として芸術を利用するのではなく、政治を、国家を、芸術作品まがいのものにしてしまおうとする。この立場に、芸術至上主義がやすやすと取り込まれてしまうのは当然である。このような連関こそ、フルトヴェングラーという「問題」から私たちが洞察すべきことなのではないか。



『巨匠フルトヴェングラーの生涯』 ヘルベルト・ハフナー／著 最上英明／訳
アルファベータ刊 定価：4,935円（税込） 2010年11月30日発行



地球の風 地域の風

株式会社カメイホールディングス
代表取締役社長

亀井創太郎氏



明治の版面にも
描かれている

創業140年の老舗は、
中興の祖である父から
息子に発展を託された

江戸時代から続く^{かめ}甕屋が、

明治維新を機に乾物問屋へと転身した。

戦後、焼跡の中から

問屋ビジネス近代化の礎を築いたのが

先代の亀井英夫だった。

そして九州新幹線全線開業を控えた今、

九州各地の隠れた地域産品を掘り起こし、

付加価値を付けて全国に発信しようとしている。



一橋大学合格を

涙を流して喜んでくれた祖父

如水会熊本支部では、50年以上前から一橋大学に合格した高校生を集めて合格祝いを行っています。実は、私も42年前に合格祝いをしてもらった一人です。最近では例年10名前後の合格者があり、合格祝いはい如水会支部長の重要業務の一つとなっています。

私が大学受験をしたときは、ちょうど学園紛争の真っ最中で、東京大学が入学試験を中止した年でした。それまで熊本から一橋大学へ進学したのは年に1人程度でしたから、私も東京の大学なら東京大学だな、くらいに何となく考えていました。ところが、その東京大学の入学試験が中止です。そんなときに父が一橋大学を勧めてくれたのです。昔の家は、1階が店舗で2階が住居になっていました。小さいときから父や母が働いている背中を見て育っていましたから、自然に自分の行く道は商業かなという思いが染みついていた。そこで、迷わず一橋大学を受験することにしました。そのころ熊本から一橋大学を受験する高校生が増え、次第に一橋大学の認知度が上がってきました。

ちょっとした運命のいた



ずらで一橋大学に入ったわけですが、緑に抱かれたキャンパスの静かな環境と学園のリベラルな雰囲気魅了されました。何よりも嬉しかったのは、祖父が涙を流して喜んでくれたことです。かつて祖父と祖母は、東京へ行商に行っていました。勉強好きだが家庭の事情で学校に行けなかった祖父は、当時神田一ツ橋にあった東京商科大学の前を通るたびに、憧れの念を深めていたのです。それだけに、私が合格したことを知って、感激もひとしおだったでしょう。

テニス三昧、種^{たね}粉^{もみ}刈りで、 系統だった勉強は？

ところが、その一橋大学に入ってオリエンテーションを受けた翌日から、一橋大学でも全学ストです。半年ぐらいいは授業も何もありませんでした。大学に入ったばかりで、何をやらなければならないのか右も左もわからないまま放り出されてしまったのです。

そこで庭球部に入って、暇つぶし(笑)に半年間はテニスばかりやっていました。何事にものめり込むタイプなのです。この庭球部に入ったのにも父の影響がありました。最初はボート部に入ろうと思ったのですが、合宿が年間200日といえますし、それでは里帰りもできません。父のアドバイスもあって庭球部に目をつけたのです。テニスなら世界中で行われていますから……。

折からの学園紛争で、大学時代は、本をよく読みましたが、学問的な系統だった勉強はできませんでした。ゼミは金融の小泉明ゼミ。競争率の高い人気ゼミでしたが、幸運なことに小泉先生は庭球部の部長でしたから、「先生、部員がゼミに入れないようではまずいんじゃないですか」と頼み込んで入れてもらいました。

1年次の期末試験はレポート提出でした。2年次から授業が始まりましたが、3年次の12月には日本興業銀行(当時)から内定が出てしまいました。当時は高度成長の最中でしたから、種粉刈りといわれるくらい、採用時期が早かったのです。あまりにも早すぎるというので、翌年から就職協定が結ばれて、

創業当時、店の周辺は、坪井川の水運を利用してさまざまな商品が集まり魚市場や青果市場などが立ち並び熊本市の台所としてにぎわっていた。明治期の版画集『熊本縣下 商工技藝早見便覧』には、船着き場からの荷揚げの様子や客の姿が描かれている。

4年次の7月から採用解禁となりました。ですから振り返ってみると、ほとんど勉強らしい勉強はできませんでした。

9年間の銀行マン経験で ビジネスの基本を身につける

もともと就職先は商社か金融と考えていました。父は私の就職先について、商社は専門にわかれていから専門性を深めることができる、

金融はさまざまな業種の顧客を担当するので幅広い能力を身につけられると言っていました。結果的に興銀を選んだのも、父のアドバイスによるものだったといえます。ちなみに興銀の入行試験は面接だけでした。当時は指定校制度がありましたし、スポーツ枠(?)での合格だったのでしょうか(笑)。

大学4年間で東京で過ごしたから、興銀では最初から支店勤務を希望しました。田舎のほうが向いていると思ったのです。そし

て、4年間の広島支店勤務のち、建設省に2年間出向し、産業調査部に戻って3年間勤務しました。広島支店で預金や興業債券の販売、融資などの支店業務を学び、建設省への出向ではキャリア官僚と机を並べて行政の勉強をし、産業調査部では調査の何たるかを知りました。短い期間でしたが、恵まれた9年間だったといえます。

私が30歳になったときに父が上京してきました。父は、私が実家に帰るもよし、東京に残るもよしという考えでした。そこで私は、「将来的には実家に帰る。10年後には帰ろうと思う」と伝えました。すると父は、「中小企業というものはそう簡単なものではない。10年も経つと銀行の色にすっかり染まってしまつて役に立たなくなる。帰ってくる気があるなら、すぐに帰ってこい」と言います。父の問題意識もわかりますし、私には地元貢献したいという気持ちもあります。そこで1週間ほど考え、同じ熊本出身の妻を説得して地元に戻る決心をしました。ところが、銀行のほうは重要な行外人脈のケアがありましたから、そう簡単に辞めるわけにはいきません。そこで、1年間はお礼奉公できちんと引き継ぎを行いました。その間は、心は熊本、体は東京という状況でした。

銀行を去るにあたって四十数回もの送別会を開いていただいたほど、上司や先輩には可愛がられ、後輩には親しまれていました。しかも、十数回は日程が合わずにお断りしたほどです。日程が重複しているため、ときには昼から、ときには朝から、ダブルヘッダー、トリプルヘッ



ダーで送別会を開いてもらいました。人間関係も含めて、いい会社でいい勉強をさせてもらったと思っています。

明治創業の家業を 近代ビジネスに転換した父

私の曾祖父の兄にあたる亀井覺平は、1869年（明治2年）に乾物問屋を創業しました。江戸時代には同じ場所で麴を製造していたようです。昔の絵図には、同じ場所に麴屋が描かれています。また、1886年（明治19年）当時の商家を紹介した『熊本縣下 商工技藝早見便覧』には、当家の店先が版画に描かれています。この冊子には面白いエピソードがあります。実は、長らくその復刻版の『熊本 商家繁盛図録』が唯一の資料と思っていたのですが、2010年（平成22年）8月に熊本の古書店で偶然に、『熊本縣下 商工技藝早見便覧』を発見したのです。冊子のタイトルも違えば、大きさも違います。しかし、内容はまったく同じことから、オリジナルだとわかりました。判型は復刻版より小さいのですが、版画は鮮明で、繊細な表現がされていることがよくわかりました。図版には、平田船の舳先が描かれており、坪井川の水運を活用していたことがよくわかります。明治維新を機に業種転換を行ったわけですが、「かめや」という屋号と水運活用という事業スタイルは継承したわけです。

第二次世界大戦により商圏も資材・財産もなのまま事業を再開してから4代目社長に就任し

たのが、父の亀井英夫です。父は海軍兵学校を出た飛行機乗りで、戦時中は九九式艦上爆撃機の指導教官をしていました。海軍中尉、特攻隊隊長で終戦。京都大学に入学しました。当時は、軍関係者は入学制限があつて競争が激しかったわけですから、頭がよかつたのだでしょうね。覚えてるのは、大変なメモ魔だったことです。海軍や大学で学んだ知識を利用して、父は経営の近代化を図りました。昔ながらの家業からの脱皮を図つたのです。父の言葉で印象的なのは、「5分前の精神」「判断を迷えば積極策をとれ」「人を育てるのに妙味あり」など、海軍色の強いものです。父の代で県内1位の座を不動のものにしたわけですから、中興の祖といつてもいいでしょう。この父のいちずな誠実さは、現在も社風として残っています。

言葉が通じない！ 見えざる壁をブレイクスルー

父の死後、遺品を整理していると面白いノートが見つかりました。表紙には「STRATEGY」とあつて、事業関係のメモのようでした。そこに、「創太郎の受け入れと後継者教育について」と書かれたページがあつて、ドキッとした。育成方針が1から6まであつて、「みんなに好かれるには」「早く実力をつけるには」「銀行の経験をいかすには」「経営者としての人脈を築くには」云々と分析的に書いてありました。

ちなみに、父の計画では、私は41歳で社長になるよう育成することになっていました。37歳

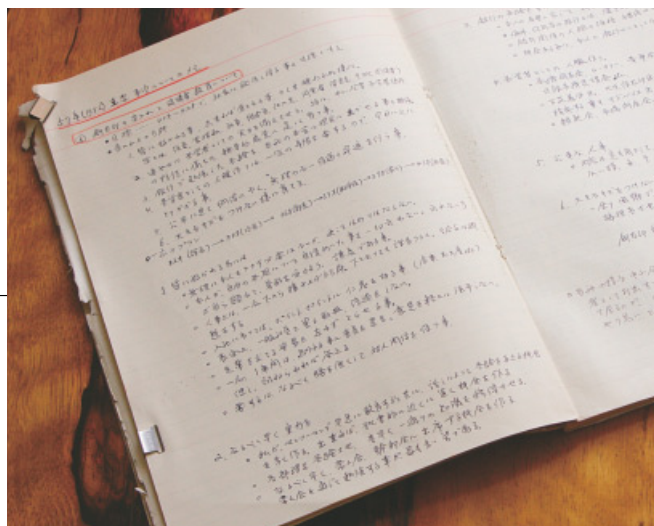
で社長になりましたから、父の計画よりは前倒しですね。

31歳で企画部長として入社。不沈空母のような日本興業銀行から田舎の中小企業への転身ですから、大変なカルチャーショックを受けました。まず、言葉が通じません。丸の内と田舎とは、同じ言葉でも感覚が違いますし、とらえ方が違います。相手もビックリして

いますし、こちらも驚いている状況で、コミュニケーションになりません。心理的に不安定な状態に陥ってしまいました。そこで、心の平安を取り戻すために、般若心経を覚えしました。そしてまず、自分の存在意義は何か、自分のやれることは何かを考えました。社長の息子だということでは、通用しませんから……。こうして



父親のノートに記された創太郎氏についてのメモ。年齢ごとの役職や関係者との人脈づくりなどについて、子細に考えていたことがわかる。





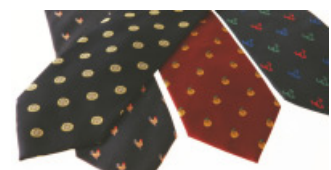
グループ企業の亀井通産株式会社の低温食品部及び嘉島物流センターの外観と、物流センター内の仕分コーナー。



亀井氏の発案による「肥後の赤・薩摩の黒」というキャッチフレーズを使った「味くらべ旅の九州」のキャンペーンポスター。



グループ企業の株式会社ベネフーズが郷土料理をレトルトで楽しめるように開発した看板商品、太平燕（たいびーえん）。



あか牛やでこぼんなど、熊本の名産品の絵柄を配したオリジナルネクタイ。



亀井通産株式会社の2009年春夏商品提案会には、地産地消の製品が多数出品された。

吹っ切るまでに、半年ぐらいかかりました。それができたのは、父が温かく、厳しく接してくれたからです。父が困難をどう捌くか、その背中を見ながら仕事を覚えました。

私がやったのは、リーダーとして大きな物流センターをつくったり、コンピュータのバージョンアップを行ったり、新規事業を手がけたり……。今までやれなかった新しいことをいろいろやりました。銀行時代に産業調査部で産業の構造転換を学んだり、融資を通じて多くの企業を見てきたりしましたから、こうした経験をかして仕事をしているうちに、存在感をアピールできました。父の期待にも応えられて、父の計画より早めに常務になり、社長になったのです。

九州産品に付加価値をつける

「肥後の赤・薩摩の黒」プロジェクト

九州新幹線が部分開業したときに、何か地域社会のためにやろうと考えました。熊本にはあ

か牛、赤酒、火の国……といった赤文化があり、鹿児島には黒牛、黒豚、黒麹……といった黒文化があります。この食文化を色で表そうと「肥後の赤」「薩摩の黒」と表現しました。これが話題を呼んだ「肥後の赤・薩摩の黒」プロジェクトです。こうした豊かな食文化を、これからは積極的に発信していこうとしています。



熊本は鹿児島、宮崎、長崎、佐賀、大分、福岡のいずれとも接していて、どこからでも来られます。何よりも雄大な阿蘇があります。2012年（平成24年）には熊本市は政令指定都市になりますから、道州制が実現すれば州都となる可能性があります。どこからも来られるという

ことは、どこへでも行けるということでもあります。九州新幹線は、九州の大動脈になります。新幹線が通じたといっても守りに入っては面白くありません。こちらからも打って出ようと、今年から関西と関東に拠点を置いて、九州一円に眠っている魅力的な地元産品を発掘して、それに付加価値をつけて自社オリジナル商品として売り出していこうとしています。すでに、両拠点に本部長を派遣して、稼働させています。

一橋大学のスポークスマンとして若者に期待すること

如水会熊本支部は一橋大学のスポークスマンですから、高校生に一橋大学を受験してもらうように働きかけています。例えば、移動講座を2回開講してもらって、熊本高校の生徒に来てもらいました。東京から熊本に戻って活躍している人も増えてきました。元気で活力があるのは女性のほうが多くて、男性は総じておとなしいようですね。地元に戻って地元でリーダーシップを発揮できる、元気な若い人に来てもらいたい。弊社





亀井創太郎 (かめい・そうたろう)

1950年熊本市新町生まれ。
1973年一橋大学商学部卒業後、
日本興業銀行入行、広島支店勤務。
1978年建設省大臣官房政策課出向、
1980年日本興業銀行産業調査部復帰、副調査役。
1982年同行退行後、
亀井通産株式会社取締役企画部長。
1985年常務取締役。
1987年代表取締役社長就任。
2007年カメイホールディングス設立、
代表取締役社長就任。

よそ 余所者、若者、馬鹿者の力が 地域に進化をもたらす

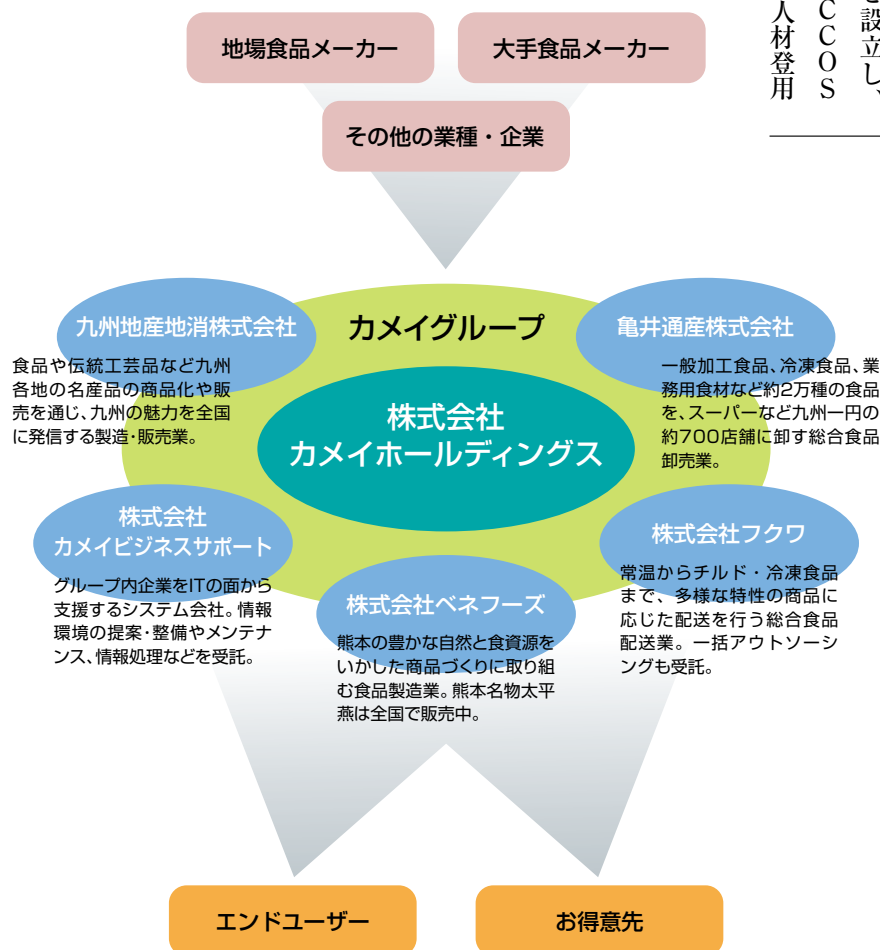
地域にはマーケティング力もなければマネジ
メント力も弱いという現状があります。せつ

の従業員の大半は熊本生まれの熊本育ちです。
若い人には一度熊本を出て外で苦勞を乗り越え
て活躍してもらいたいと思っています。そして、
都会の感覚や雰囲気、文化、教養を身につけ、人
脈を築いて帰ってきてほしい。地元しか知らない
人の中に入って、違った発想で活躍する。これ
が熊本には重要なのです。もちろん、めざましい
活躍をしている人もいます。例えば、職員45
0名の赤字5億円の病院に事務長として入って、
2年間で赤字5億円に転換させた若者もいます。

く素晴らしいポテンシャルを秘めていても、ポ
テンシャルがいつまでもポテンシャルのまま
いることが多く、宝の持ち腐れです。状況を変
える力になるのが、「余所者」「若者」、そして
言葉は悪いですが「馬鹿者」の存在です。つま
り、地域にしがらみのないフレッシュな人材、
熱意と馬力のある若い人、何事にもめり込め
る集中力のある人材こそが、地域おこしの起爆
剤となるのです。

弊社は2009年（平成21年）に創業14
0年を迎え、それに先立ち2007年（平成19
年）にホールディングカンパニーを設立し、
2008年（平成20年）には「MOCOS
140」と名付けた経営改革を実施。人材登用
を行い、グループ経営を強
化しています。この半年で

《カメイグループ企業の取引関係図》



優秀な幹部候補生が10名入ってきました。不況期には、余所で苦勞し、さまざまな経験を積んだ、思いがけないほど優秀な人材が獲得できます。

私たちの使命は、「食品流通業を中核として、関係者との共生を大切に、存在感を高め、地域の発展に寄与すること」。品質志向、顧客主義、融和と精神、市場創造をキーワードに、地域密着の付加価値の高いビジネスを展開していきます。これが、私が地元に戻った意味でもあります。

在学生の保護者・在学生

3名 (5,100,000円)

和泉善馬 様
澤 俊男 様
高橋 潤 様

卒業生のご家族・一般の方

10名 (2,250,500円)

池谷陽子 様
岡村 操 様
祖父江周子（政雄夫人） 様
寺本尊美様ご遺族・尚司 様 殷昌 様
西岡恒三 様
本田吉宏 様
松本登美枝 様
北村義信 様
本田孝雄 様
吉仲 崇 様

企業・法人等

17団体 (44,930,000円)

医療法人 輝見会 北村医院 様
エターナルプレザー株式会社 様
株式会社紀伊國屋書店 様
株式会社コムラ 様
株式会社コトブキ 様
坂元醸造株式会社 様
山九株式会社 様
株式会社島津製作所 様
セイカ食品株式会社 様
ダイハツ工業株式会社 様
株式会社日本アクセス 様
株式会社フジマック 様
株式会社ブリヂストン 様
株式会社三井住友銀行 様
株式会社メディアム 様
明治安田生命保険相互会社 様
他1団体

本学役職員

12名 (7,620,000円)

お詫びと訂正

前号〔HQ冬号 Vol.29〕
において、ご寄付者ご芳
名に誤りがございました。
ご寄付者および関係者の
皆様にお詫びいたします
とともに、以下の通り訂
正させていただきます。

【誤】卒業生のご家族
岡本 操 様

【正】卒業生のご家族
岡村 操 様

佐野智恵子 様	高野一郎 様	内藤秀治 様	早川 武 様	松井 是 様	安田 勤 様
佐野直紀 様	高橋俊一 様	中 康二 様	林 健一郎 様	松井 裕 様	安西正嗣 様
サベス ムクシン 様	高橋 豪 様	中 由規子 様	林 誠一郎 様	松井悠記 様	矢部 信 様
沢木一夫 様	高橋 勉 様	長岡宏幸 様	葉山 薫 様	松岡 武 様	山内善浩 様
澤田長二郎 様	高橋輝夫 様	中川勝敬 様	速水康治 様	松崎信介 様	山口 修 様
澤田雅之 様	高山 聡 様	中島 白 様	原田潤一 様	松崎 一 様	山口富士生 様
澤本百合 様	瀧澤 巖 様	中島 薫 様	原田佑介 様	松下克史 様	山崎達也 様
塩貝剛志 様	滝沢弘俊 様	中島大祐 様	半田秀夫 様	松永佳子 様	山崎利夫 様
塩月光彦 様	滝島守夫 様	中嶋郭治 様	番場孝司 様	松村 宏 様	山下国久 様
汐見啓介 様	武内邦信 様	中島正樹 様	日置慶太 様	松本邦明 様	山添 茂 様
志賀司昌 様	竹内規夫 様	長島達明 様	樋口和也 様	松本章三 様	山田英一 様
篠原将司 様	竹内幸男 様	長嶋汎子 様	樋口誠一 様	松本貴毅 様	山田忠市 様
志波幹雄 様	竹澤敏幸 様	長島泰治 様	樋口 喬 様	松本龍夫 様	山田富三 様
柴尾昌保 様	竹下邦彦 様	長島克昌 様	樋口哲彦 様	眞野 新 様	山田英夫 様
柴田 篤 様	竹下啓一 様	中田 毅 様	日暮康之 様	萬野善昭 様	山田 博 様
柴田隆至 様	武田敏春 様	仲田礼三 様	久田英一郎 様	三浦 功 様	山田 信 様
島 誠一 様	竹田義脩 様	中田 悟 様	菱田智子 様	三浦大輔 様	山中清寛 様
島崎勇夫 様	武田芳之 様	長塚真琴 様	菱沼久三郎 様	三浦大輔 様	山中 進 様
嵩根一夫 様	武知栄治 様	中西宜雄 様	日野利治 様	三木文夫 様	山中 尚 様
嶋根英昭 様	竹山 梓 様	中野景介 様	平越 浄 様	御正直義 様	山本 克 様
島袋祐子 様	田島博道 様	中原茂行 様	平塚誠毅 様	水上裕康 様	山本清一 様
島村大也 様	田代 聡 様	中丸太加志 様	平野勝洋 様	水村健一郎 様	山本晃平 様
清水義昭 様	龍興寿典 様	中村一郎 様	広岡幸夫 様	水本幸一 様	山本世樹 様
東海林 徹 様	龍野正也 様	中村貴史 様	広川和義 様	溝口邦雄 様	山本隆彦 様
白井寛之 様	巽 重機 様	中村貴之 様	福嶋尚之 様	三谷則雅 様	山元 強 様
白石啓明 様	田中 章 様	中村真悠子 様	福田良之 様	三橋和夫 様	山本敏久 様
白川幸一郎 様	田中 清 様	仲村元伸 様	福地義和 様	三橋秀方 様	山本秀明 様
白川 克 様	田中啓資 様	中村泰郎 様	藤井英喜 様	三橋喜文 様	山本浩文 様
新 悟 様	田中成昌 様	永吉晋吾 様	藤音 浩 様	三堀 浩 様	山本雅嗣 様
末崎孝幸 様	田中 武 様	南雲俊一 様	藤木達夫 様	葉袋政彦 様	山本 豊 様
末藤孝之 様	田中憲経 様	名取 正 様	藤崎史夫 様	峰崎直樹 様	山本芳夫 様
菅谷忠晴 様	田中裕樹 様	名雪都久 様	藤原泰輔 様	御村治雄 様	鎗田良昭 様
杉田智代 様	田中 宏 様	成瀬榮二 様	藤本真一 様	三宅朝昭 様	要津義治 様
杉原宗人 様	田中富士雄 様	成瀬 聰 様	藤森隆明 様	宮崎泰明 様	横澤憲司 様
杉山勝利 様	田中守男 様	西尾征郎 様	藤山二郎 様	宮下博行 様	横山まみ 様
鈴木昭彦 様	田中良典 様	西川忠吾 様	二上浩光 様	宮田美香 様	吉井弘藏 様
鈴木頼一 様	田辺四郎 様	西村 治 様	二木太三 様	宮武祥夫 様	吉木健雄 様
鈴木 馨 様	田辺正直 様	西山孝太郎 様	船木 紀 様	宮本皓市 様	吉澤直樹 様
鈴木喜一郎 様	谷 光宏 様	西山 武 様	船越高志 様	三輪勝平 様	吉田 俊 様
鈴木謙二郎 様	谷口 明 様	西山信之 様	船橋武志 様	三輪隆司 様	吉田幹則 様
鈴木 茂 様	田沼行雄 様	西脇 修 様	古川雅一 様	宗像伸行 様	吉野修三 様
鈴木象三 様	月森晴基 様	仁田原征二 様	古川洋一 様	村居 哲 様	吉野利宏 様
鈴木 仁 様	柘植英紀 様	新田晴男 様	古元良治 様	村上岩雄 様	吉原道博 様
鈴木典比古 様	辻村 亨 様	丹羽健二 様	外園克己 様	村上元成 様	吉本康德 様
鈴木政士 様	津田宏治 様	根本真一郎 様	星 秀一 様	村上民雄 様	依田 誠 様
瀬尾泰弘 様	津田樹己 様	根本日出春 様	星 直人 様	村田大樹 様	和田敬一郎 様
瀬川隆治 様	筒井真人 様	野崎雄二 様	星 正紀 様	村本卓生 様	和田充弘 様
関 秀介 様	黒葛原麻衣子 様	能勢 浩 様	星野 昭 様	村山隆男 様	和田幸夫 様
関内雅男 様	常岡千城 様	野田純一 様	星野 文 様	望月 理 様	和田義昭 様
関根一良 様	角田佑介 様	野田 稔 様	細井広高 様	望月憲一郎 様	渡辺 薫 様
関根富雄 様	椿原幹雄 様	野原貞夫 様	細川五郎 様	森 泰助 様	渡部修二 様
妹尾将宏 様	鶴岡 坦 様	野村達男 様	細川達郎 様	森 雅彦 様	渡邊信一 様
膳尾 聡 様	鶴巻 暁 様	生野 勝 様	細野以知郎 様	森 正之 様	渡辺寿々男 様
曾根正義 様	寺田武男 様	長谷互二 様	堀 清司 様	森 義昭 様	渡部芳典 様
高井秀雄 様	東城 剛 様	長谷川孝男 様	堀内一優 様	森口勝暁 様	昭和17年会 様
高垣健治 様	當麻雅生 様	長谷川卓也 様	前田逸平 様	森田 徹 様	昭和17年ほうこん会 様
高木正信 様	堂本 隆 様	長谷川 裕 様	真栄田 修 様	守永孝之 様	一橋大学昭和45年会有志一同 様
高崎 章 様	常盤 弘 様	畠中正志 様	前田 洋 様	守屋凱充 様	他108名
高崎俊平 様	徳永興彦 様	馬場孝次 様	前田光幸 様	森山和浩 様	
高崎真治 様	利光哲生 様	馬場 肇 様	前原俊宏 様	森山 透 様	
高柴昌司 様	土肥宏吉 様	馬場英俊 様	増田裕一 様	八木功治 様	
高島敏勲 様	富山愷男 様	馬場正順 様	増谷 博 様	柳沼 寿 様	
高島正雄 様	豊島忠雄 様	濱田 潔 様	股野容子 様	矢崎洋一 様	
高須幹夫 様	内記 昭 様	浜田英生 様	町井直行 様	矢島一孝 様	
高野明彦 様	内藤 治 様	浜谷千絵 様	松井繁樹 様	安岡知昭 様	

一橋大学基金へのご協力、心より御礼申し上げます。

卒業生、在学生の保護者・ご家族の方をはじめとした皆様からご寄付をいただき、2011年1月末現在で、総額約33億9,000万円（入金済分）に達しました（うち2億円は、創立125周年記念募金より繰り入れ）。この場をお借りし、皆様のご協力に厚く御礼申し上げます。

ご寄付をいただきました方々へ感謝の意を込め、ここにご芳名を掲載させていただきます。

今号では、2010年12月1日から2011年1月末日までの間にご入金を確認させていただいた方を公表させていただきます。公開不可の方、本学役職員につきましては掲載しておりません。また、ご寄付者が万が一お名前がもれている場合につきましては、誠に恐縮でございますが、基金事務局までご連絡ください。

ご寄付をいただいた方すべての皆様を「一橋大学基金寄付者芳名録」に記し、一橋大学の歴史に永く留めさせていただきます。また、30万円以上（法人100万円以上）のご寄付に関しましては、ご芳名を本館設置の「一橋大学基金寄付者銘板」に記させていただきます。

なお、募金目標額は100億円となっております。皆様の一層のご支援を賜りたくお願い申し上げます。



ご寄付のお申し込みについて

●お手紙・ファックスまたはお電話で、ご住所とお名前をお知らせください。基金事務局より、ご案内、寄付申込書および払込用紙をお送りいたします。

●一橋大学基金ホームページより、クレジットカードによるお申し込みも受け付けております。トップページ上方の「ご寄付のお申し込み」メニューからお進みください。

一橋大学基金ホームページ

<http://www.kikin.ad.hit-u.ac.jp/>

如水会会員証カードを お持ちの卒業生の皆様へ 分割ご寄付のご案内

一橋大学基金では（社）如水会と連携し、如水会会員証カードによる分割ご寄付の受け付けをしております。

お申し込みいただきますと、如水会会員証カードから定期的な自動払い込みにてご寄付を頂戴することとなり、お振込の手間を省くことができます。

また、ご寄付の回数は、年1回（2月または8月）と年2回（2月および8月）よりお選びいただけます。如水会会員証カードをお持ちの卒業生の方はぜひご検討ください。

詳しくは、ホームページをご参照いただくか、下記までお問い合わせください。

【お問い合わせ先】

一橋大学基金事務局

〒186-8601 東京都国立市中2-1

TEL：042-580-8888

FAX：042-580-8889

E-mail：gen-kj.g@dm.hit-u.ac.jp

【ご寄付者ご芳名】※五十音順に掲載させていただきます。

卒業生

793名・4団体（87,435,449円）

ご寄付金額（累計）

100万円以上

31名・1団体

50万円以上
100万円未満

16名

50万円未満

746名・3団体

石黒美幸 様
石原道郎 様
植田正義 様
逢見直人 様
麻植 茂 様
大泉 潤 様
小川昭一 様
久保修太郎 様
小塚埜武寿 様
小林幸弘 様
三枝 匡 様
田中雅穂 様
長島和弘 様
仲野嘉一 様
中山ひとみ 様
永山在紀 様
服部弘志 様
蛭田政男 様
吹野博志 様
宮城敬雄 様
村井 了 様
森田孝之 様
矢尾 宏 様
和田耕兄 様
渡邊 彰 様
一橋三八会 様
他6名

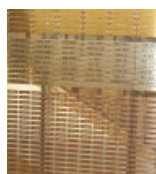
井上勝規 様
大石克洋 様
川村忠太郎 様
喜多村禎勇 様
澤登正樹 様
白石恭三 様
鈴木文雄 様
仙波英躬 様
手島次郎 様
戸田裕一 様
福地平三郎 様
藤田浩司 様
峯村 榮 様
他3名

相川雅人 様
相澤義夫 様
相田康宏 様
會田晴康 様
青山隆之 様
赤塚光弘 様
赤松幹夫 様
秋山喜美雄 様
朝倉瑛行 様
安達 武 様
天野勝伸 様
綾部真人 様
荒尾耿介 様
栗井 淳 様
飯川弘一 様
飯島智保 様
飯島隆介 様
飯田健次 様
飯田直樹 様
飯塚清彦 様
井黒達憲 様
池田隆弘 様
池田善至 様
池谷宗夫 様
井澤 徹 様
石井知之 様
石井 裕 様
石川公基 様
石川 覃 様
石川義人 様
石黒 雅 様
石田政明 様
石附昭一 様
石戸谷 正 様
石野道雄 様
石橋忠義 様
石原慎司 様
石原尚文 様
石俊行人 様
石和田四郎 様
市川和明 様
井出義勝 様
井戸武一郎 様
伊藤俊一 様
伊藤純一 様
伊藤 博 様
伊藤 満 様
伊東洋三 様
伊東義弘 様
稲垣健一 様
稲垣富雄 様
稲泉昌弘 様
大塚昌一 様
井上準彌 様
井上眞吾 様
井上孝則 様
井守美穂 様
入野英次 様
入山賢一 様
岩城明良 様
岩崎 誠 様
岩瀬 厚 様
岩瀬靖史 様
岩見善治 様
岩村宗通 様

岩元正和 様
植木博士 様
上田賢一 様
上野良英 様
上間悠一郎 様
上村 隆 様
上山憲一郎 様
歌川 毅 様
歌田崇宏 様
内ヶ崎正之 様
内山晴一朗 様
海上 明 様
梅原直人 様
梅原 肇 様
卜部敏直 様
浦山建治 様
宇留間和基 様
柴田 聡 様
江口栄治 様
江口直明 様
恵谷 博 様
江間真幸 様
遠藤敏男 様
大池 明 様
大楠忠男 様
大楠哲史 様
大久保文雄 様
大下敬雄 様
太田勝己 様
太田琢磨 様
太田晴康 様
大谷史朗 様
大津洋一 様
大野 新 様
大野龍一 様
大間知隆二郎 様
大村庄司 様
大森 是 様
大山金男 様
大山 寛 様
岡崎耕三 様
岡田隆之 様
岡田紀雄 様
岡田 浩 様
岡田泰典 様
尾形昌彦 様
岡村昌征 様
岡本岳彦 様
岡本行夫 様
小川昭雄 様
小川宣昭 様
萩原達郎 様
奥 哲司 様
奥澤宏幸 様
奥村真悟 様
奥山秀朗 様
小栗誠治 様
尾崎 博 様
長田洋征 様
押田秀人 様
小田真嗣 様
小田川泰威 様
小野見彦 様
小野正晴 様
小野澤康夫 様

小野寺壽男 様
小幡祐子 様
小原芳夫 様
折橋治泰 様
折本洋紀 様
鏡 武 様
柿原康一郎 様
笠原康司 様
風間利彦 様
柏本一宏 様
柏倉康成 様
春日敏彦 様
糟谷武範 様
片桐忠孝 様
片山和一 様
片山洋希 様
門井俊機 様
加藤榮三 様
加藤一夫 様
加藤慎一 様
加藤秀夫 様
加藤元晴 様
加藤泰則 様
角谷紘二 様
金井 章 様
金木利公 様
金子弘毅 様
金田 操 様
金廣鉄平 様
狩野知昭 様
鹿子木 満 様
神岡 一 様
上垣内義博 様
神谷守重 様
亀山茂利 様
河合智之 様
川越 侃 様
川腰桂三 様
河野裕昭 様
川端俊一 様
河南充彦 様
河村健吉 様
河村 進 様
美穂 様
川村裕英 様
神田敬司 様
菊岡昭謙 様
菊池康夫 様
菊池友里 様
岸井進二 様
喜勢成明 様
木谷義彦 様
北村武次 様
木津裕人 様
木下隆司 様
木下 稔 様
木村公彦 様
木村昭一 様
木村真一 様
木村麗子 様
木本正樹 様
木山義英 様
清井孝典 様
楠本雅弘 様
國武胤清 様

國吉健一 様
熊塾御堂 真 様
久米増也 様
倉上雅彦 様
栗田 康 様
黒住莞爾 様
黒田博文 様
黒野幸春 様
黒山敏宏 様
小池信也 様
小池辰夫 様
小泉靖夫 様
河野 哲 様
河野邦利 様
河野豊弘 様
河野 浩 様
古賀 進 様
古賀正人 様
小暮英一 様
小坂謙一郎 様
小嶋哲彦 様
小島 徹 様
小杉俊二 様
児玉健治 様
児玉進矢 様
後藤育夫 様
後藤隆志 様
後藤哲也 様
小林 昭 様
小林昭衛 様
小林千鶴 様
小林正幸 様
小松崎 浩 様
五味政和 様
小宮博治 様
近藤紘彦 様
齋川純子 様
三枝邦夫 様
西郷信也 様
西条幸彦 様
齋藤金義 様
齋藤健介 様
斎藤紀明 様
齊藤 遥 様
斎藤広志 様
酒井 亮 様
坂田信之 様
坂本 要 様
坂本秀雄 様
坂本幸雄 様
作田 稔 様
佐久間静雄 様
桜井弘一 様
櫻井俊典 様
佐々誠一 様
佐々木 宏 様
佐々木雅一 様
佐々木純之 様
佐藤慎一 様
佐藤太亮 様
佐藤義明 様
佐藤吉晴 様
佐藤吉哉 様
眞田 学 様



銘板色

【ブロンズ】

個人：30万円以上

法人：100万円以上

【シルバー】

個人：100万円以上

法人：500万円以上

【ゴールド】

個人：1,000万円以上

法人：5,000万円以上

【プラチナ】

個人：3,000万円以上

法人：1億円以上

（金額は累計）

一橋大学大学院国際企業戦略研究科 (ICS) が、 北京大学光華管理学院、ソウル大学経営学部・経営専門大学院と 「BESTビジネス・スクール提携協定」を締結しました

2011年1月10日、一橋大学大学院国際企業戦略研究科 (ICS) は、北京大学光華管理学院、ソウル大学経営学部・経営専門大学院と「BESTビジネス・スクール提携協定」を締結しました。「BEST」は、各大学がキャンパスを構える都市名〈北京 (BEijing)・ソウル (Seoul)・東京 (Tokyo)〉から名づけられました。

本提携協定では、日本、中国、韓国のトップクラスのビジネス・スクール3校が、研究・教育面で包括的な協力をしていくことを定めています。今後は、合同の教育プログラムの設定 (交換留学プログラム、ダブル・ディグリー等)、ビジネス・経営分野での卓越した合同研究の実施 (共同出版、シンポジウムの共同開催等) を予定しています。また、ビジネス・経営分野だけにとどまらず、あらゆる分野においての情報交換を行いたいと考えています。



Campus Information

第7回 一橋大学関西アカデミア〈シンポジウム〉を開催

「東アジアの成長と地域金融・通貨協力」をテーマとする第7回一橋大学関西アカデミア〈シンポジウム〉を、2011年2月19日 (土) 13時30分～17時30分、大阪国際会議場で開催いたしました。

基調講演に、国際協力銀行経営責任者の渡辺博史氏を迎え、一橋大学大学院経済学研究科の佐藤宏教授の司会のもと、渡辺氏、神戸大学大学院国際協力研究科の三重野文晴教授、一橋大学の小川英治理事・副学長、一橋大学大学院経済学研究科の奥田英信教授がパネル・ディスカッションを行いました。

プログラムは、山内進一橋大学長の挨拶を皮切りに、渡辺氏

による基調講演、奥田教授による講演、三重野教授による講演、小川理事・副学長による講演、パネル・ディスカッションと続き、山内学長の挨拶で終了いたしました。

参加者は、関係者を含め約180名。当日は天候にも恵まれ、大阪ばかりではなく、奈良や和歌山、愛知からも、企業や公的機関に勤務されている方や学生、市民が集まり、活況を呈しました。

次回の一橋大学関西アカデミアは、2011年11月12日 (土) に大阪国際会議場で開催する予定です。ふるってご参加ください。

◆当日の映像は大学HPからご覧いただけます。 <http://www.hit-u.ac.jp/function/outside/news/2011/0303.html>



国際協力銀行経営責任者
渡辺博史氏



神戸大学大学院国際協力研究科
三重野文晴教授



一橋大学長
山内 進



〈編集・発行〉

一橋大学HQ編集部

〈編集部長〉

副学長（財務、社会連携、企画・評価、情報化担当） 小川英治

〈編集長〉

言語社会研究科教授

坂井洋史

〈編集部員〉

商学研究科准教授

松井 剛

経済学研究科教授

水岡不二雄

法学研究科教授

屋敷二郎

社会学研究科教授

阪西紀子

国際企業戦略研究科准教授

大上慎吾

経済研究所教授

青木玲子

〈外部編集部員〉

有限会社イブダワークス

吉田清純

〈印刷・製本〉

図書印刷株式会社

〈お問い合わせ先〉

一橋大学企画・広報室広報担当

〒186-8601 東京都国立市中2-1

Tel : 042-580-8032 Fax : 042-580-8016

http://www.hit-u.ac.jp/

koho1284@dm.hit-u.ac.jp

※ご意見をお寄せください。

一橋大学企画・広報室広報担当

koho1284@dm.hit-u.ac.jp

※本誌掲載の文章・記事・写真等の無断転載はお断りします。

●広告掲載お問い合わせ先

一橋大学企画・広報室広報担当

TEL : 042-580-8032

編集部から

先日、立て続けに「中世ラトビア法」「古アイルランド法」といったあまり知られていない研究領域について共同研究をしないかという誘いを受けた。しかも、それに強く惹かれる自分がある。全く未経験の分野なのに、なぜだろうか。一つには太古へのロマンがある。以前目にしたインタビューで「なぜそんな大昔のことを研究するのか」と尋ねられた研究者が「データにがんじがらめにされず、存分に想像できるからだ」と答えていたのが印象に残っている。しかし、それだけで未知の世界に踏み込んでいくほど、ロマンチストではない。もう一つの理由は、研究面での海外発信を求められる時代ならではの計算である。未開拓に近い領域ならすぐ第一線の研究者としての地位を確立できる可能性が高い。海外移籍に際してまず中小クラブで定位置確保をめざすサッカー選手と同じ作戦である。マイナー選手のまま帰国するか、ビッグクラブに移籍してトッププレイヤーの仲間入りができるかは、そこでの戦いぶりで決まる。が、まずは国際舞台のピッチに立たないと何も始まらない。（茶鼠）

平成23（2011）年度 社会学部連続市民講座のご案内

本年度も連続市民講座を開催いたします。

2011年度のテーマは、「常識を問う」です。

日常的でありながら、きわめて社会科学的な概念である

「常識」について、皆様と一緒に考えていきたいと思います。

多くの市民、そして高校生のご参加をお待ちしております。

通年テーマ

「常識」を問う—社会科学の多様な視点



日程と講演者

4月23日 町村敬志教授（社会学、都市研究）

5月21日 坂上康博教授（スポーツ史、スポーツ社会学、社会史）

6月18日 若尾政希教授（日本近世史、思想史）

7月16日 高田一夫教授（市民社会論、社会政策）

9月10日 坂元ひろ子教授（中国近現代思想文化史）

10月15日 安川 一教授（理論社会学、視覚社会学）

11月12日 大杉高司教授（文化人類学、カリブ海地域研究）

12月17日 村田光二教授（社会心理学、社会的認知研究）

※講座の題目は未定です。※いずれの日程も土曜日開催です。

会場 兼松講堂（一橋大学国立西キャンパス）

時間 13：30～15：00

参加方法 参加は無料。どなたでも入場できます。
当日、直接会場までお越しください。

問い合わせ先 一橋大学社会学部・社会学研究科事務室

〒186-8601 東京都国立市中2-1

TEL : 042-580-8212 FAX : 042-580-8210

E-mail : info@soc.hit-u.ac.jp

一橋大学兼松講堂レジデントオーケストラ

国立シンフォニカーによる
第2回定期演奏会を開催します

ヨーロッパ名曲の旅

ロシア

歌劇「イーゴリ公」より「ダクタン人の踊り」／ボロディン

オーストリア

オーボエ協奏曲「第1楽章」／モーツァルト

フィンランド

交響詩「フィンランディア」／シベリウス

—休憩—

ドイツ

「魔弾の射手」序曲／ウェーバー

オーストリア

交響曲第7番「全楽章」／ベートーヴェン

指揮：宮城 敬雄

オーボエ：渡辺 克也

開催日程：5月3日〈火・祭日〉

会場：一橋大学兼松講堂

開演時間：14:00 (13:15 開場)

料金(税込)：プレミア席 4,500円 / S席親子ペアシート 4,000円 / S席 3,000円 / 学生席 1,500円

※S席をお子様(小学生～高校生まで)とペアでご購入される場合、2枚6,000円を4,000円に割引致します。

※S席親子ペアシートは200席、100組ペア限定となります。※学生席でご入場の際、学生証の提示をお願いする場合があります。

※乳幼児、ベビーカーでの入場はご遠慮ください。

主催：社団法人 国立シンフォニカー

後援：一橋大学、社団法人 如水会、国立市、国立市教育委員会

協賛：高輪プリンツヒェンガルテン、国際ソロプチミスト くにたち

協力：一橋大学管弦楽団

チケットのお求め・お問い合わせ

高輪プリンツヒェンガルテン 03-3443-1521 (10:00～20:00 月曜定休)

※S席親子ペアシートの取り扱いは、高輪プリンツヒェンガルテンのみとさせていただきます。

他のプレイガイドおよびネットでの取り扱いはしておりませんのでご了承ください。

プレイガイド

■チケットぴあ 0570-02-9999 ■電子チケットぴあ <http://t.pia.jp/> (Pコード:129-685)

■国立市内の取扱店

一橋大学生生活協同組合(西ショップ) 042-575-4184

洋菓子・喫茶「白十字」南口店 042-572-0416

国立楽器 国立店 042-573-1111 <http://www.kunitachi-gakki.co.jp/>